

熊野古道国際会議の記録

文化の道を探る



はじめに

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産リストに登録されてから、2009年で5周年を迎えました。

三重県ではこれを記念して、「文化の道」をテーマに、イコモス（国際記念物遺跡会議）と連携し、「熊野古道国際交流シンポジウム尾鷲2009」と「世界遺産国際交流シンポジウム伊勢2009」等の熊野古道国際会議を開催しました。

この報告書は、その概要をまとめたものです。

これらの世界の知見を参考に、世界遺産として評価された熊野古道をはじめとする当地の文化遺産を、人類共通の宝物として未来に継承していきたいと考えます。



伊勢会場：竈日館



尾鷲会場：三重県立熊野古道センター

熊野古道国際交流シンポジウム

2009



道の専門家たちが
世界18カ国から参加。

それは熊野古道が世界と出会い、世界とつながった記念すべき日となりました。

2009年10月31日、世界遺産の「紀伊山地の霊場と参詣道」の登録5周年を記念して、「熊野古道国際交流シンポジウム尾鷲2009」が、尾鷲市にある三重県立熊野古道センターで開催されました。

イコモスのグスタボ・アローズ会長をはじめ、世界18カ国から文化遺産保存分野の第一線の専門家が参集しました。

開会にあたって野呂知事は、「熊野古道は世界に誇る財産です。このシンポジウムを通じて、その価値を再認識する契機になれば大変喜ばしい」と挨拶。また、来賓のアローズ会長と中川正春文部科学副大臣からも祝辞が述べられました。この日の参加者は約230人。「文化の道を探る」をテーマに熱い討議が展開されました。





若い世代も参加した プレミーティング。

国際会議に先立ち、三重県ではさまざまな活動が繰り広げられました。

以前から熊野古道による地域おこしが盛んだった三重県東紀州地域では、2001年の世界遺産暫定リスト登載を機に、世界遺産にどう対応していくかの検討が行われました。その成果として、関係者が共有する行動指針「熊野古道アクションプログラム」が生まれました。

2008年にはその最新版「熊野古道アクションプログラム2 追記編」がまとめられ、「外の輪づくり」「内の輪づくり」「保全と活用の輪づくり」の3つの輪づくりが提唱されました。その一環として、この国際会議は準備されました。

2009年、世界文化遺産に大きな影響力を持つイコモス(国際記念物遺跡会議)文化の道国際学術委員会(CIIC)の年次総会を三重県に招致し、国際的な専門家と地域の関係者が直接話し合う機会が実現することになりました。シンポジウムに先立って、熊野古道国際会議プレミーティングと称したワークショップが開催され、三重大学の学生や地元の若手経営者など、新たな関係者も参加した「内の輪」が育まれました。



シンポジウムでは、 秋吉久美子さんも熱弁。

シンポジウムの基調講演では、イコモスCIIC会長のマリア・ローザさんが、「世界遺産の新しい分類である文化の道は、大きな潜在性を持っている」と力説。また、山伏の姿で登場した金峯山修験本宗宗務総長の田中利典さんは、「熊野古道が今日まで続いてきたのは、沿道の平和が保たれてきたからだ」と熱く語りかけました。

この後、「未来へつなぐ熊野古道伊勢路の人々」と題したビデオを上映。また、シンポジウムの大きな柱でもあるパネルディスカッションでは、「地域活性化セッション」「将来への継承セッション」「保存管理セッション」の3つのテーマに分かれ、それぞれの分科会ごとに熱い議論が交わりました。

分科会にパネリストとして参加された女優の秋吉久美子さんは、ゲストスピーチでも熊野に対する熱い思いを語りました。

最後に、熊野古道協働会議の代表世話人花尻薫さんの閉会の辞でシンポジウムは終了しました。

このシンポジウムでは、三重大学ユネスコクラブ、三重県立相可高等学校調理クラブ、紀北国際交流協会など、たくさんの方々の協力により運営されていたことがとても印象的でした。



**熊野エクスカーションでは、
那智大社、花の窟、
馬越峠を訪ねる。**

10月31日には、イコモスの専門家らを対象に熊野地域のエクスカーション（現地視察旅行）が行われました。

一行が最初に訪れた熊野那智大社では、那智大滝や大社社殿に隣接する西岸渡寺など、目に映るものすべてに興味を持たれ、神仏習合などの考え方について熱心に質問されていました。

次に訪れた花の窟では、巨大な岩倉と七里御浜など、熊野信仰の原形を示す聖地の有様に大変興味を持たれた様子でした。こうして信仰を背景にしたわが国の文化的景観について理解を深めていただき、尾鷲と伊勢の2つのシンポジウムに臨んでいただきました。

11月3日には、すべての行程を終えたアロース会長に、熊野古道伊勢路を特別に歩いていただきました。

石畳の感触を確かめるように歩かれた会長は、よく管理された森林に感嘆され、この景観を後世に伝えていくことの重要性を熱く語られました。それと同時に、熊野古道の精神性を文化的景観として守るためには、法整備の強化なども含めて、官民が一体となったしっかりとした仕組が必要だと意見を述べられました。

グラビア 熊野古道国際会議プレミーティング1・2
 熊野古道国際交流シンポジウム尾鷲2009、熊野エクスカージョン…………… 1～4
 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」広域図・世界遺産関連用語の解説…………… 6～7

熊野古道国際交流シンポジウム尾鷲2009

—文化の道を探る— …………… 8

主催者挨拶 野呂昭彦（三重県知事）…………… 9
来賓挨拶 グスタボ・アローズ（イコモス会長）…………… 10
 中川正春（文部科学副大臣）…………… 10
基調講演 マリア・ローザ（イコモス文化の道国際学術委員会会長）…………… 11
 田中利典（金峯山修験本宗宗務総長）…………… 12
分科会 地域活性化セッション…………… 13～15
将来への継承セッション…………… 16～18
保存管理セッション…………… 19～21
ゲストスピーチ 秋吉久美子（女優）…………… 22
閉会挨拶 花尻 薫（熊野古道協働会議代表世話人）…………… 23
 グラビア 文化的景観の世界遺産、熊野古道伊勢路の光景…………… 24～25

世界遺産国際交流シンポジウム伊勢2009

—これからの世界遺産の意義を問う— …………… 26

主催者・共催者挨拶 前野 巖（日本イコモス国内委員会委員長）…………… 27
 荒井正吾（奈良県知事）…………… 27
 仁坂吉伸（和歌山県知事）…………… 28
 野呂昭彦（三重県知事）…………… 28
基調講演 グスタボ・アローズ（イコモス会長）…………… 29
 マリア・ローザ（イコモス文化の道国際学術委員会会長）…………… 30
第1セッション 世界平和の構築に寄与する世界遺産の特質 事例検証…………… 31～35
第2セッション 世界平和の構築に寄与する世界遺産の特質…………… 36～38
総括セッション これからの世界遺産の意義を問う…………… 39～41
「平和のための世界遺産」に関する伊勢宣言…………… 42～43
熊野古道国際会議を終えて 前野 巖（日本イコモス国内委員会委員長）…………… 44
 グラビア 世界遺産国際交流シンポジウム伊勢2009
 伊勢エクスカージョン…………… 45～48
記録映像(DVD)・謝辞…………… 巻末

※肩書きはすべてシンポジウム開催時のものです。

※海外の専門家の方々の発表のまともは、同時通訳の日本語翻訳をもとに要約しています。

そのため、発表者の意図する内容の最適な日本語表現になっていないことも想定されます。その旨ご了承ください。

編集チーム / 小島明弘（株式会社東海ビデオシステム）

長谷川裕芳（三重県政策部東紀州対策局東紀州対策室）

平野 昌（三重県政策部東紀州対策局東紀州対策室）

山田和子（山田事務所）

監修 / 日本イコモス国内委員会、イコモス文化の道国際学術委員会

デザイン・印刷・製本 / 新日本工業株式会社

DVD制作 / 株式会社東海ビデオシステム

世界遺産関連用語の解説

(参考資料:『ユネスコ世界遺産年鑑』)

■イコモス (ICOMOS)

日本名は国際記念物遺跡会議。人類の遺跡や建造物の保存を目的として、1965年に設立された国際機関。文化遺産の調査、評価を行い、世界遺産委員会に協力している。日本国内のイコモス会員が組織する機関として、「日本イコモス国内委員会」がある。

■イコモス文化の道国際学術委員会 (CICIC)

イコモスは、文化遺産に関わるさまざまな課題や問題について、それぞれの分野ごとに国際学術委員会を設置して取り組んでいる。文化の道国際学術委員会 (CICIC) はそのうちの1つであり、国際協力認識、研究文化の道の増進や全体としての価値の重要性を促進し、文化的景観や遺跡の保全を目的として取り組んでいる。

■インテグリティ

「完全性」や「完全性」を意味する。遺産の価値を構成する必要な要素がすべて含まれていること。また、長期的な保護のための法律等の制度が確保されていることも含む。

■オーセンティシティ

「本物であること」「真正であること」を意味する。主に建造物や遺跡などの文化遺産が持つ本物の芸術的、歴史的な価値のこと。修復などにおいては、形態・材料・構造・工法の真実性が求められる。

■紀伊山地の霊場と参詣道

三重、奈良、和歌山の3県にまたがる三大霊場(熊野三山、吉野・大峯、高野山)と参詣道(熊野参詣道、大峯奥駈道、高野山町石道)の独特の景観が認められ、2004年7月7日、日本で初めて遺産全体が「文化的景観」として登録された文化遺産。

■危機遺産リスト

武力紛争、自然災害、大規模工事、都市開発、観光開発、商業的密猟などにより、その普遍的価値を損なうような重大な危機にさらされている遺産を記載しているリスト。

■熊野古道

熊野三山に至る巡礼の道の名称。熊野街道、熊野道とも呼ばれる。経路によって3つに分類でき、紀伊半島の西岸を通る「紀路」、東岸を通る「伊勢路」、中央部を通る「小辺路」がある。紀路は途中で「中辺路」と「大辺路」に分かれる。

なお、世界遺産リストに記載されている「紀伊山地の霊場と参詣道」の熊野古道は「熊野参詣道」と呼ばれ、ほかの参詣道には「大峯奥駈道」「高野山町石道」がある。

■世界遺産

世界遺産とは、「世界遺産リスト」に記載されている、顕著にして普遍的な価値をもつ人類共通の資産をいう。地球の生成と人類の歴史によって誕生し、過去から現在へ引き継がれ、さらに未来へ引き継いでいくべき貴重な宝物。

き貴重な宝物。

世界遺産は記念物や建造物群、遺跡などからなる「文化遺産」、地形や地質、生態系、景観などからなる「自然遺産」、文化遺産と自然遺産両方の定義を満たす「複合遺産」の3つに大別される。「世界遺産リスト」はユネスコで採択された「世界遺産条約」に基づいて定められている。

■世界遺産委員会

世界遺産条約に基づいて組織されており、締約国の中から異なる地域及び文化を偏りなく代表するよう選ばれた21カ国によって構成される。原則として毎年1回開催され、新規に世界遺産に登録される物件や拡大案件、危機遺産リストの登録および削除や遺産のモニタリングや技術支援、世界遺産基金の用途などを審議決定している。

■世界遺産暫定リスト

世界遺産条約を締結した国は、将来世界遺産リストに記載する計画のある物件を「暫定リスト」としてユネスコに提出する。事前に暫定リストに記載されていないと、世界遺産委員会へ推薦書を提出しても審査されない。

■世界遺産条約

正式には「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」と言つ。1972年、第17回ユネスコ総会において採択された。2009年4月現在、186カ国が批准している。

日本は1992年に第125番目の締約国として条約を結んだ。

■文化ツーリズム(文化観光)

文化による地域の魅力づくりを通して、地域の人々が生業(農業・漁業・林業・サービス業など)に従事する新しい観光のかたち。この取組により、新しい事業の創出や既存の産業に相乗効果などをもたらすもの。

■文化的景観

1992年、世界遺産の登録基準の中に新たに加えられた概念で、「自然と人間の共同作品」を表す景観を意味する。人が自然を利用して、長い時間をかけてつくり出された景観。

■ユネスコ (UNESCO)

国際連合の教育科学文化機関として1945年創設。教育、科学、文化を通じて諸国間の協力を促進し、世界の平和と人類の福祉に寄与することを目的とする。日本は1951年に加盟。

■ユネスコ世界遺産センター

1992年のユネスコのパリ本部内に設置された組織で、世界遺産委員会の事務局の役割を果たす。主な仕事内容は、世界遺産委員会の開催のための事務、締約国への技術・情報提供、世界遺産基金の運営など。



文化の 道を 探る。

熊野古道国際交流シンポジウム
尾鷲2009

Owase 2009
10.31_土

開催場所 三重県立熊野古道センター 14:00 ~ 18:00 (開場 13:00)

主催：三重県

共催：日本イコモス国内委員会、イコモス文化の道国際学術委員会

後援：文化庁、奈良県、和歌山県、尾鷲市、熊野市、紀北町、御浜町、紀宝町

協賛：伊勢角屋麦酒、「美し国おこし・三重」実行委員会、キリンビール(株)三重支社、
麒麟ビバレッジ(株)中部圏地区本部、元坂酒造(株)

協力：(株)エムアンドエムサービス、紀北国際交流協会、熊野古道協働会議、
NPO法人熊野古道自然・歴史・文化ネットワーク、
三重県立相可高等学校調理クラブ、三重大学ユネスコクラブ

この国際交流シンポジウムを通じて、 持続的な地域づくりを進めていきます。



三重県知事
のろあきひこ
野呂昭彦

みなさま、ようこそ三重へ!!

「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されて、今年（2009年）の7月7日で5周年を迎えました。これを記念して三重県では、「イコモス文化の道国際学術委員会」の年次総会を三重県に招致し、熊野古道国際会議を開催することといたしました。本日はここ尾鷲市の県立熊野古道センターにおいて、明日は伊勢市の賓日館において、2つの国際交流シンポジウムを開催する運びになりました。また、熊野と伊勢のエクスカージョンも準備されております。

この会議のため、イコモス会長のグスタボ・アローズさんをはじめ、文化の道国際学術委員会会長のマリア・ローザさん、そのほかたくさんの方々のイコモスの専門家の皆様に三重県にお越しいただきました。心から歓迎と感謝の言葉を申し上げます。また、中川文部科学副大臣にも、わざわざ会場に駆けつけていただきました。

本日のシンポジウムでは「文化の道を探る」をテーマに、イコモスの関係者の皆様はもちろん、パネリストの皆様、地元の皆様にも多数ご参加をいただくことになっています。また、女優の秋吉久美子さんもご参加をいただけるということで、大変嬉しく思っています。

3つの目標を掲げて取り組んでいる。

さて、「紀伊山地の霊場と参詣道」の大きな特徴は、日本で初めて遺産全体が文化的景観として世界遺産に登録されたということです。三重県側の伊勢路について申し上げますと、昔から聖地へ向かう参詣道であると同時に、地域の人々と密接な関わりを持った生活の道であり、林業を生業としている人々には今も重要な道になっています。また、この世界遺産は、熊野古道という道に関するものだけではなく、その周辺の自然や歴史、あるいは地域の人々の暮らしも含めた独特の文化すべてが、文化的景観として総合的に評価されています。

このような世界遺産となったふるさとの財産を保全していくために、三重県では地元の皆様と一緒に、これまで次の3つの目標を掲げ取組を進めてきました。

1つ目は、まず、「価値に気づく」こと。文化的景観等について学ぶため、講座やフォーラムなどを開催したり、大学や研究者の方々との交流を進め、熊野古道の本質について勉強を続けています。

2つ目は、「守り伝える」こと。地域の語り部や保存活動のボランティアの方々との協働により、地域の方々や次代を担う子どもたちに熊野古道の価値を伝えていきます。

3つ目は、「伊勢路を結ぶ」という取組です。ご承知のとおり、熊野と伊勢は日本の精神文化を育んできたところで、熊野古道伊勢路はこの2つの聖地を結ぶ参詣道です。約170キロメートルに及ぶ道のりですが、この伊勢路の地図をつくったり、道標を立てたりして、伊勢路を通して歩くことができる環境を整えてきました。

こうした取組などについても、このシンポジウムを通じて、皆様から忌憚のないご意見や国際的な視点からの評価をいただければ幸いに存じます。

本日のイコモスの皆様との討議により、世界遺産の保全や活用の海外での先進的な事例を学ばせていただきながら、これからの持続的な地域づくりや熊野古道の保全と活用に、大いに生かしていきたいと思っています。

熊野古道は世界に誇る貴重な財産です。このシンポジウムを通じて、熊野古道の価値を再認識する契機になれば、大変喜ばしいことでもあります。そういう意味におきまして、このシンポジウムが成果多からんことを心から願っています。

世界でも珍しい道の登録地として、
新しい時代に
アプローチしてほしい。

文部科学副大臣
なかがわまさはる
中川正春



私も三重県側の熊野古道はだいたい踏破をしております。語り部の皆さんと一緒に歩いていただきましたが、当地の歴史や文化的な価値を説明していただく際にも、温かい人情にあふれていて、人と人との交流といった観点からも、ここでは素晴らしい活動が展開されているなど、ずいぶん誇りに思っていました。

世界遺産リストへの登録5周年ということで、今日はイコモスの皆さんにも多数ご参加をいただき、ここから世界へ向けて情報発信する機会を得ましたことは、誠に喜ばしいことだと思います。グスタボ・アローズ会長はじめ、今日ご参加をいただいた皆さんには、私からも心からお礼を申し上げます。

先月、ユネスコの総会がパリで開かれました。私もそれに参加しましたが、そこでの日本のポジションは、想像以上に大きいことを知りました。文化、教育、科学技術といった分野においても、日本はいかに大きな存在であるかということを変更して認識しました。

実は、世界の皆さんと一緒にやっというところ、日本が世界に提唱しているプログラムがあります。「ESD」と言われているものです。持続可能な社会開発をするために発想し、行動できる人材を育成するための教育で、そういうプログラムを日本が先頭になって進めているのです。

道の世界遺産は、現在、熊野古道とスペインのサンティアゴの巡礼路の2つだけと聞いています。歴史、文化の中で自然との共生を図りながら、この文化遺産をしっかりと保全していく。この姿勢がユネスコで私たちが進めようとしているESD活動にも通じていくと考えています。

そういう意味におきましても、この熊野古道を中心に、これからの課題を提起していく。そんな流れになっしてほしいと思っています。

この活動につきましても、私の政策の中でも最優先課題として、今後も一生懸命に取り組んでまいります。皆さんと一緒に、ここから新しい情報を発信して、新しい時代をつくっていきましょう。そんなメッセージをお届けしながら、私のご挨拶にかえさせていただきます。ありがとうございます。

世界の素晴らしい文化遺産は、
世界市民全員で
共有すべきものである。

イコモス（国際記念物遺跡会議）会長
グスタボ・アローズ



「紀伊山地の霊場と参詣道」が、世界遺産リストに登録されて5周年を迎え、このような催しが開催されたことは大変素晴らしいことです。いかに日本の皆様が、遺産の保護活動に力を注いで来られたのか、その祝福にふさわしい催しだと思います。

さて、ユネスコの「世界遺産条約」が、1972年のパリ総会で採択されてから、まもなく40周年を迎えます。また、世界遺産リストへの登録件数も、近い将来1,000件になるようとしています。こうした中で、今、さまざまな議論が行われています。

その中でも重要なのは、条約の方向性に関する問題です。このところ条約の方向性は、とすれば、美人コンテストのような偏りを見せ、とても危険な状態にありました。こうした傾向をいち早く転換し、本来の方向性に再び戻していくことが重要になっています。それは脆弱な地球において、世界で最も重要な遺産物・記念物の保存に、もっと力を入れていくということにつながっていきます。

今年も残念ながらドレスデン・エルベ渓谷（ドイツ）が、世界遺産の登録リストから外されました。これはイコモスにとって責任重大な問題であります。現在、私どもは約750のサイトを持っていますが、今後はこれまでに以上にモニタリングにも力を入れなくてはならないと思っています。日本のイコモス委員会の皆様にも、ぜひ、私たちのお手伝いをしていただければと思います。

また、世界遺産活動は、そのリストに載ったものだけを守る救助活動だと見られてはなりません。たとえ一部の人しか見ないものであっても、それが真に価値あるものであるならば、決してそれを犠牲にしてはならないのです。イコモスも、世界市民全員も、人類の共通の財産である世界遺産だけでなく、すべての遺産の面倒を見なくてはなりません。

世界遺産条約を、もともと意図した国際協力のための条約にするためには、国際社会の参加が必要であり、ユネスコ世界遺産委員会の役割は重要です。それと同時に、日本のような国には模範を示していただきたいと思っています。すべての素晴らしい文化遺産を世界市民全員と共有しようという寛容な精神から、世界遺産を推薦し、守っていただく。

文化遺産の概念と構成要素が進化するなか、「文化の道」には大きな可能性がある。

可能性



イコモス文化の道(CIC)国際学術委員会会長
マリア・ローザ・シュアレツ・インクラン・ドウカシ

文化遺産の概念と構成要素は複雑で進化している。

イコモス国際学術委員会の文化の道委員会の代表として、まずは「文化の道」についてお話ししたいと思います。

皆様もご承知の通り、遺産の概念と構成要素は、ここ数十年の間にさまざまな進化を遂げてきました。それは単に伝統的な遺産の中に、新たに「文化的景観」や「道」といったものが加わっただけではなく、文化遺産という言葉そのものが、無制限の構成要素を含むようになってきたのです。

もともと文化遺産は、記念物だけに焦点が絞られていましたが、昨今では記念物のつながりを文脈の中で価値づけるようになってきたとも言われています。「歴史的な都市」といった分類が加わった。「都市的景観」「文化的景観」も広義の意味で加わった。また、文化の道やシリアル・ノミネーション(個々の要素ではなくシリーズとしての価値の推薦)などが浮上してきたことによって、有形・無形の価値観が複雑なモザイクのようになっていきました。

これらを解決していくためには、やはり経験に基づいた実証的な分析を行って、それぞれの歴史的・文化的な関係を把握し、調査しなければなりません。

遺産の保存・管理についても、世界同一の思想を前提とするのは、あまりにも現実性がありません。たとえば、ある社会において、極めて価値があると思われるものが、別の社会ではそうとは限りません。それぞれが歴史と慣習を特定する構成要素を所有しているわけで、それが文化遺産としての価値を高めるものであり、それに基づいた保存・管理をしなくてはならないのです。

従って、日本のような東洋の国に対して、西洋の保存・修復技術を強要するのはおかしな話です。また、その逆も真なりです。もちろん、それを要素として取り入れることは重要なことです。それを保存のスタンダードとしてしまうと、イコモスの設立時の精神を損なってしまうでしょう。

文化の道には大きな潜在性がある。

世界遺産の中で「文化の道」は、新しい分類の一つです。世界遺産リストに登録された件数が、今まで限られているという事実がそれを物語っています。

しかし、今後について言えば、「文化の道」には大きな潜在性があります。文化の道はこの地球上の人類の歴史と文化について、より多角的に、より正確な解釈を提供し、この地球上の歴史・文化を包括的な方法でわかりや



すく理解できるようにしてくれるものだからです。

一方、世界遺産への登録の動機が、地域的、国内的な意義によるものが多く、より幅広い歴史的・文化的な文脈の構成要素としての研究や評価は、今のところほとんど進んでいないのが現状です。

そのことから、多くの文化財の本来の意義が縮小し、より広範囲で持っている重要性が薄められ、その価値の多くが失われようとしています。文化の道というダイナミクスの中で、主要な要素構成を保持しているにもかかわらず、忘れられているのです。

すなわち、現在の多くの文化財は、特定の見方のみによって評価されているわけです。こうした中で、「文化の道」は、私たちにさまざまな可能性を広げてくれます。道は、多様な文化をつなげるもので、単なる輸送とかコミュニケーションというものを超えています。

1993年に「サンティアゴ巡礼路」が、2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録され、08年には「文化の道憲章」がイコモス総会で

採択されました。しかし、これからは文化の道については検討を重ねていくべきだと思います。

現在、世界ではさまざまな動きがあります。たとえば、アジアの商業ルート、シルクロードの価値に注目しているものがあります。また、アメリカでもカミノ・レアルという、イコモスCIIICメンバーによって進められているプロジェクトがあります。

最後になりましたが、私たちはイコモスの「文化の道憲章」の序文を忘れてはなりません。そこで、「文化の道」は、さまざまなレベルで遺産のマクロ構造を持ち、さまざまな人々の多様な貢献を反映することを明らかにしています。そして、より公平で、より多様で、より現実的な歴史と文化に対するビジョンを提供しています。

マリア・ローザ・シュアレツ・インクラン・ドウカシ(スペイン)
イコモスCIIIC会長、スペインイコモス国内委員会委員長、カステイリャ・レオン州歴史文化遺産局局長、文化遺産の保護に国際レベルで活躍中。スペイン・コンプルテンス大学、同大学院(専門分野)は国際迄。

平和



金峯山修験本宗宗務総長
たなかりてん
田中利典

道について考えていくことは、
平和について考えていくことである。

神仏習合は 日本独特のものである。

私は、吉野の金峯山寺という、修験道のお寺からやってまいりました。今日は、「紀伊山地の霊場と参詣道」の意義ということで、お話をさせていただきます。

私は、熊野古道だけを見ておりませんと、この世界遺産の本質は捉えにくいのではないかと考えています。もう少し言いますと、修験道の行者のことを「山伏」と言うのですが、この山伏こそが「紀伊山地の霊場と参詣道」のある種の本質ではないか。そんなふうに思っています。普段はこういう山伏装束でお話はないのですが、今日は敢えてこの格好でお話をさせていただきます。

修験というのは、日本独特の山岳信仰から生まれた日本古来の神と、外来の宗教である仏教の仏、この神と仏を分け隔てなく揉んできた、いわゆる「神仏習合」「神仏混淆」の民族宗教であるとされています。

さて、5周年を迎えた「紀伊山地の霊場と参詣道」は、3つの霊場と3つの道からなっています。吉野・大峯、熊野三山、そして高野山。吉野・大峯は修験道の霊場で、熊野三山は神道の霊場、それから高野山は真言密教の霊場です。

この異なる宗教の聖地、霊場が道でつながれているわけです。吉野・大峯は大峯奥駈道、熊野三山

は熊野古道、高野山は高野山町石道。紀伊半島の大きい自然に囲まれながら、互いに異なる霊場が道によってつながれ、千年単位で守られてきた。そこがこの世界遺産の意味なのです。

たとえば、熊野には那智大社があります。那智の大滝があります。あの大滝の水の勢いに聖なるものを感じて、日本人は思わず拝むのです。それを「飛瀧権現」と呼ぶのですが、そういうスピリチュアルなもの、聖なるものを滝の中に見るという精神性が、日本独特のものなのです。紀伊半島の自然の中で、神も仏も分け隔てなく、互いに異なる信仰が道でつながって、千年単位で日本人の精神性を育んできた。実は、ここに世界遺産の大きな意味があるわけです。

道の文化遺産には 大きな可能性がある。

皆さんもご存知のように、「紀伊山地の霊場と参詣道」の中で、三重県には遺産登録となるような建物はありません。道だけが遺産登録をされております。

でも、この道にはすごく意味があるのです。と言いますのも、熊野古道の伊勢路は、伊勢神宮と熊野を結ぶ道です。伊勢神宮というのは、天皇家の祖先神が祀られているところです。それから熊野三山は、伊勢神宮よりも古い神道。さらに熊野権現に

象徴される修験の信仰があり、青岸渡寺は観音浄土で、それぞれ異なる信仰の地を伊勢路で結んでいるわけです。

このほか世界には、もう一つ、道の世界遺産があります。サンティアゴの道という、キリスト教徒の巡礼路です。でも、この熊野古道の場合は異なる信仰を道でつないでおり、それを日本人は何も不思議に思わない。神と仏を同じように扱っても、何の違和感もない。私たち日本人は、そういう独特の精神性を持っているわけです。

さて、道の遺産ということですが、私はこの道の遺産というものに、大きな可能性を感じております。道というのは、その沿道の平和が保たれていないと、道として成しません。たとえば隣の国同士が喧嘩をしていたら、道は道として成り立ちません。伊勢神宮と熊野三山が喧嘩をしていたら、今日まで伊勢路も残らなかったはずなんです。

世界遺産はユネスコが提唱したもので、互いの文化や風土をよく理解して、そして平和を考えていくんだという精神から始まりました。そして、それぞれの国の文化や風土を大切にしていこうと、世界遺産条約が生まれたわけですが、まさに道を考えていくということは、世界平和を考えていくことにつながっていきます。

そういった意味も含めて、「紀伊山地の霊場と参詣道」に展開



する道は、世界に一つの例を示すことができるのではないかと、そう確信しております。この確信はどこから生まれたかと言うと、世界遺産活動を通じていろいろ学んだからです。先ほども言いましたが、この世界遺産は3つの霊場から成っています。このうち吉野・大峯についての登録に、最初に手を挙げたのは実は私なのです。ですから、この世界遺産について、自分で勝手に責任があると思っています。

三重県の熊野古道伊勢路は、素晴らしい。世界遺産という非常に大きなポテンシャルを持ったことになって、そこに大切にすべきものがあることに気づいていく。そして、自分たちの風土に帰属させていく。そういったものを取り戻す活動が、今後は大事になってくるのではなからうかと思えます。

田中利典(日本)

金峯山修験本宗宗務総長、金峯山寺執行長。全日本仏教会参事、日本山岳修験学会評議員、紀伊山地三霊場会議代表幹事、吉野ユネスコ協会副会長。龍谷大学文学部仏教科卒業、叡山学院専修科卒業。

分科会 地域活性化セッション

世界遺産登録地として、どんな活動や方向が望ましいのだろう。



さまざまな議論の中心には、やはり地元の考えがあるべきです。

ほとんどの欧州諸国において、世界遺産リストへの登録は、今や地方や都市をグレードアップするためのチャンスと捉えられています。また、新しい観光手段として、「文化ツーリズム」(学習型・長期滞在型観光)が、一種のブームにもなっています。

イコモスの「国際文化観光憲章」の中でも、訪問先の文化を学ぶことは大切なことだと指摘しています。但し、文化ツーリズムもセンシティブ(敏感)な史跡などでは、収容能力を超える観光客が訪れると、それだけでマイナスの影響が出たりします。

現に、そういった事例がいくつもあります。たとえば、アテネのアクロポリスですが、2008年には約107万人の観光客が訪れました。ギリシャ統計局の発表によると、同国の年間観光客は約2700万人で、そのうち約5パーセントがここを訪問しているそうです。特に8月には、毎日約5000人が「聖なる岩」を訪れており、文化遺産のオーセンティシティ(真正性)が破壊されそうになっています。

過去20年間、欧州では文化収益が経済的に重要になってきており、観光客の需要も年々高まっています。そのため多くの国々で



ソフィア・アヴゲリノ・コロニアス(ギリシャ)
イコモス本部執行委員。アテネ国立工科大学教授。歴史の価値のある記念物・遺跡・都市の保存と保護に努めている。CIVIVIH委員会の専門委員等として、イコモスの世界遺産の研究に幅広く貢献している。

は、自国の文化遺産を見直して、他との差別化を図ろうとしています。博物館を新築したり、歴史セクターを還元したり、さまざまな文化スペースを創設したりしています。こうした文化のポピュラー化を地元のマスコミも称賛し、また観光客もレジャー的な感覚で楽しもうとしています。

その最たる例がアクロポリスの新しい博物館です。これにはイコモスも反対したのですが、アクロポリスの麓に建てられ、2008年6月に開館しました。そして、開館以降3カ月で1日約1万5千人が来館。毎時1500人から2000人が訪れているというのです。そのほとんどが外国人です。

世界観光機関のデータによると、全世界の海外旅行者は、毎年10億人を超えています。当然のことながら、文化遺産に深刻な影響を及ぼし、環境にも深刻な影響を及ぼします。そういう観点からも、昨今の文化ツーリズムの需要には、もっと議論していく必要があります。

最も大切なことは地元の人々に決定に参加する権利を得るとともに、さまざまな側面の議論に地元の人々が参加していくことです。

文化遺産の保存には、地元の人々とのパートナーシップが必要です。

アメリカのトレイル(歴史街道)は、ヨーロッパから人々が移民した際に、東海岸から西へ向かって移動したため、そのほとんどが東西に走っています。サンタフェ・トレイルやオレゴン・トレイル、カリフォルニア・トレイルなどは、とても有名なルートですから皆さんもご存知でしょう。

こうした東西ではなく南北に走っているルートが、アメリカには2つだけあります。2つの「エル・カミノ・リアル」で、このルートはともにメキシコシティを出発点としています。これらは広大なアメリカ大陸をまたぐ交易ルートで、南北にも素晴らしい交流が行われていたことを物語っています。

そして、私たちが近年認識し始めたことは、アメリカの大地にはアメリカインディアンと呼ばれる先住民がたくさんいたということです。そこでその先住民のグループと協力して、どのようにしてトレイルや文化的なルートができたのか。ここ数年、私たちは彼らの視点から理解を深めるため、アパッチ、コマンチ、パプロインディアンなどのところに行つて話を聞いています。

一方、アメリカにはおなじみの「ルート66」というのがあります。



マイケル・ロメロ・テイラー(アメリカ)
アメリカ歴史街道国立公園局文化財専門官。約20年間にわたってイコモスとともに活動を続け、ラテンアメリカ、ヨーロッパ、アジアにおける土造建築、文化の道などに焦点を当てた保存をテーマにした講義を行っている。

これは1926年から85年まで重要な役割を果たした近代的な道路で、アメリカ独特の文化を生み出してきたルートです。わが政府におきまして、これを保存する必要があると考えたわけです。政府がそういうふうに発想したのではなく、一般市民のボランティアの人たちが重要であるということ政府に訴えたわけです。

ほかに、考古学的な史跡などがあり、保存には多くの課題があります。また、アメリカは広大な土地ですので、晴れの日には100キロぐらい先まで見えるのですが、こうした景観をいかに保存していくか。そういったことも考えていく必要があります。

しかし、私たちにとって、最も大切なことは、人々とのパートナーシップです。彼らの協力がなければ、保存・保護・語り部は実現することができません。アメリカでは沢山のボランティアを集めることができますが、彼らは年々高齢化しているので、今後は若い人たちの参加に期待していきたいと思っています。

スリランカでは仏教の教えに従って、無償の労働力による保存を進めています。



サミタ・マナワドゥウ（スリランカ）
イコモス（ICOMOS）アジアパシフィック地区副会長、スリランカイコモス国内委員会委員長、スリランカ・モラトゥワ大学建築学部教授、世界遺産「キャンディ」や「ゴール」の保存と管理に貢献している。

スリランカでは有形・無形の文化遺産の保存に、地域の参加が大きな役割を果たしています。いろんな言説、土着の原則が、2000年にわたって醸成され、仏教の精神のもとで文化遺産の保存に地元市民が参加しています。

そのうち有形の遺産に対しては、2つのコミュニティの形態で参加します。ひとつは自主的な参加で、これは「シャラマダナ」という形で参加します。そして、もうひとつは、巡礼者などによる間接的な参加です。

自主的な参加は、かなり古くからあったものです。しかし、インドやポルトガル、オランダ、イギリスなどから次々と侵入を受けて、この間にスリランカの原理原則の大半が放棄され、いつの間にかコミュニティによる参加も姿を消していたのです。

1980年頃になって、中央文化基金というものが設立され、これがユネスコのサポートを受けて、ようやく歴史的な記念物の保存活動が始まりました。しかし、このユネスコのサポートは10年間の時限的な措置だったので、そのあと外国からの資金を頼って記念物をサポートしていくのが難しくなり、市民が資金を出し合ってみ

んなで保存しているということになったのです。

こうしたプロセスを経て、市民参加型の保存活動が復活したわけです。現在、スリランカには5つの世界遺産がありますが、これらの記念物の保存活動にあたっては、新聞広告などで「シャラマダナ」の募集を呼びかけています。

ちなみに「シャラマ」とは、労働を意味します。「ダナ」というのはお供えです。つまり、労働力を提供する。労働だけでなく、食べ物や衣服もお供えする。死ぬと眼球もお供えするわけです。献血もします。これは何でもお供えすれば、来世において重んじられるという、仏教の教えから来ています。

男性も女性も、大人も子どもも、軍隊も学生も、みんな保存活動に参加します。まったく1銭の報酬もなく、紅茶を無料で飲める程度で、無償の労働力を提供してくれるのです。このような協力を得て、スリランカでは文化遺産の保存活動を進めているのです。

私たちは来訪者たちの期待にほんとうに応えられているのだろうか。



内山裕紀子（日本）
くまの体験企画代表。熊野古道センターサテライトオフィスの職員などを経て、2008年に「くまの体験企画」を設立。若年層を中心とした個人客を対象に、インターネット上を取り入れた「着地型エコツア」を提供している。

私は、「くまの体験企画」というエコツアアの事業所をやっている。熊野古道で食べている数少ない個人事業者ではないかと思っています。これまではこういった発想は、地元では無かったと思います。

私もボランティア参加からはじまって、いろんな地域活性化のイベントに参加してきました。もちろん、それはとても意味のあることですし、現在も続けていますが、そのボランティアに参加するとすることは、果たしてみんなが可能なことだろうか。そんな疑問を持つようになったのです。

つまり、自分が食べていけないのに、ボランティアに参加できるのかということ。それは今の若い人たちも、たぶん、同じような考えではないかと思うのです。私は、熊野古道が大好きだし、地元も大好きです。けれども、自分が生活していけないのに、地域活動に参加するというのは大問題です。

だから私はボランティア活動も続けつつ、地域活動も続けつつ、熊野古道で何かしら経済効果を得られるように、個人事業主としてくまの体験企画を立ち上げ、一応食べていけるようになってきたところ。こういった動きが、地

元の若い人たちの間から、もつと出てくればいいと思っています。

そして、最近つくづく思うことは、やはり私も地元人間だということ。これからどう保全していけばいいのか、町なかに対する経済効果はどうなのかと、いつもそのことを考えてしまいます。でも、肝心の来訪者はどうなんだろう。こちらにやってきた人たちは、本当に満足して帰ってきているんでしょうか。リピーターになってくれているのは、ほんのごく一部だけじゃないでしょうか。

団体ツアーでやって来たお客さまでも、本当に満足して帰ってくださる方もあれば、個人で来たお客さまでも、まったく満足せずに帰っていかれる方もあります。「団体ツアー」＝「満足」「個人旅行者」＝「満足」とは、一概には言えないということ。一人ひとりの来訪者の意見を汲みとって、次にかしていくこと、次につなげていくことが、とても大事なことだと思っています。

世界遺産の景観としてふさわしいか、そのフィルターを通すことが大事だと思う。



速水 亨（日本）
速水林業代表、(株)森林再生システム代表取締役。2000年、日本初のFSC（森林管理協議会）認証を取得。(株)日本林業経営者協会会長、熊野古道協働会議の世話人でもある。

私の家は、先祖代々、この熊野で林業を営んできました。その関係から馬越峠の片側のほとんどが、私のところの森林だったり、始神峠も私のところの森林を通っていたりしています。世界遺産の道とどう関わっていけばよいのか、どんな森林管理をしていけばよいのかと、いつも悩みながら仕事をしています。

熊野古道が世界遺産になったばかりの頃、三重県の行政は地元が森林管理に対して、あまり配慮がないように見えました。その後たびたび相談をいただくようになって、森林管理の歴史や方法などについて、私の知っている限りのお話をさせていただきました。

熊野は日本で最も歴史のある林業地域のひとつです。その長い歴史の中で、熊野古道の背景としての森林だとか、日本人の精神性にかかわる独自の景観を人工林がつくりだしてきたことをお話ししました。

そういうなかで、林業と熊野古道の真正性のバランスの難しさを感じます。当初、県からは「針葉樹ばかりで真つ暗だ」と言われましたが、熊野古道の森林は江戸時代から戦前までの長い期間は密植で真つ暗でした。近年はよく管理されてきたなと思っています。森

林管理も時代とともに変化していくもの。その変化自体も一つの文化的景観として認めていくしかないのだろう。私はそういうふうと考えています。

ただし、その景観が世界遺産として、本当にふさわしいかどうか。そのフィルターをしっかりと通したうえで、森林管理を行っていくことが、私たちに課せられた大きな役割ではないかと思っています。その際の経済的な問題はどうするかということですが、今、私たちが抱えている問題です。

実は、この間の台風で沢山の木が倒れました。そこでボランティアの方々や速水林業のスタッフが出かけて行って、人様の山も含めてきれいにしたのですが、そういう時の経費の問題だとか、景観の問題だとかは、もう少し行政も含めて、真剣に議論していかなければならぬと思っています。

その議論がしつかりできると、熊野古道と続いているまちの景観などの配慮につながっていくのではないのでしょうか。その過程を経て、ここを訪れた人たちが満足されて、それをビジネスに変えていく。そこに熊野古道の次のステップがあるのではないかと考えています。

コーディネーターまとめ
地域の活性化というテーマは、いくら時間をかけて議論しても足りないくらいです。

今日はとても刺激的な一日でした。アテネからお越しのコロナアスさんは、世界的な観光地であるアクロポリスの丘の麓に、新しい博物館ができて急激に観光客が増えているが、それがアテネの景観や文化にふさわしいものかどうか。地元では大変な議論があつたということをお話しいただきました。アテネと熊野古道を同じ次元で語ることはできませんが、世界遺産を活用した地域の活性化というものが、いかに難しいものであるか。今日のコロナアスさんのお話を聞いて、いろいろ学ぶことは多かつたように思います。

テイラーさんの歴史街道の話は、ほんとうに面白かったです。アパッチ族とかコマンチ族というようなインディアンたちが、どういう道を歩いてきたのか。スライドを使って説明していただきましたが、広大な荒野を走る高速道路の横に、彼らが歩いた道が今も残っている。また、西部開拓時代に幌馬車を通った道、アメリカのポピュラー文化をつくったルート66なども、ちゃんと文化ルートとして保存されている。いかにもアメリカらしい文化に対する考え方だと思いました。

それからマナフドウさんのお話は、さすがに仏教の国スリランカですね。日本でもお寺や神社に対して、昔はあんなふうに奉仕作業をしていたわ



宗田 好史（日本）

けですが、スリランカにはそれがまだしっかりと残っているんですね。

地元からご参加の内山さんのお話は、若い人に熊野古道を守り続けてもらうためには、まず、どうすれば食べたいけるかということを考える必要がある。これはまさに地域の持続的な発展、あるいは文化遺産の管理と、それから将来への発展という大きなテーマであります。

速水さんのお話も、非常に大きなテーマでした。この地域には、江戸時代から続く林業の長い歴史があります。伊勢と熊野の神が出会うという古代の世界も、確かに非常に重要な話には違いありませんが、今もなお熊野古道が息づいているのは、山を守ってきた歴史があつたからです。

とにかく、この「地域の活性化」というテーマは、いくら時間があつても足りないくらいです。こういう機会が登録5周年の今回だけのものではなく、次の10周年、20周年と続いていくことを心から願っています。

イコモス文化観光国際学術委員会日本代表
日本イコモス国内委員会委員。京都府立大学
人間環境部環境デザイン学科准教授。工学博士。法政大学工学部建築学科卒業。同大学院
イタリピアピサ大学、ローマ大学留学。

分科会 将来への継承セッション

世界遺産を伝えていくためには、何が大切で何が問題なのだろう。



文化遺産を伝えるということは、新旧の世代の間に関係を持つことです。



アンジェラ・ロハス・アバロス(キューバ)
イコモス本部執行委員、元キューバイコモス国内委員会委員、イコモス国際学術委員会委員、ハバナ大学建築学部教授、都市計画の専門家。2002年のマドリッドでのイコモスの総会以来、3期連続で執行委員に選出されている。

世界遺産を次世代にどのようにつないでいくかということで、昨年ケベックのイコモス総会で採択された憲章をベースに、文化の道とイコモスの憲章に関わる解釈についてお話しします。

継承していくということは、直接的な関係を遺産と人々との間に持つということです。そして、旧世代と新世代の間に関係を持たせるといえることです。意味を継承するということは、アイデンティティをつくり、さまざまな関係性を継承していくことです。その継承というのは解釈を通じたり、プレゼンテーションを通じて行われていくものです。

インタープリテーション(解釈)とプレゼンテーションは異なるものです。解釈というのは、この憲章を十分に解釈するということ。さまざまな研究やいろいろな作業を解釈するということが、有形・無形の文化遺産について知識や理解を深めることです。

それに対してプレゼンテーションは、どのように文化遺産を選択し、価値を管理していくか、その特徴は何であるかということを示したものです。

インタープリテーションとプレゼンテーションは、訓練・研修・能力開発などで習得することがで

きます。次代を担う子どもたちや大学生の間で、こうした学習の輪を広げていくとよいでしょう。

解釈により、地域の人々の意識をもっと高めること。その地においてプレゼンテーションをうまく行うこと。それから、管理計画などとの関わりも重要です。

特に、文化の道の場合には、非常に特徴的なところがあります。マリア・ローザ先生のお話にもありましたが、さまざまな文化遺産を含んでいたります。そのためにも、学際的なチームの参加が望まれます。また、共通の作業基準をベースにして全体像を見失わないようにします。森を見ることも忘れてはならないのです。

そして、最後にもう一つ、包括性も大事なことです。確かに記念物や場所の保存・管理は重要なことですが、そこに住んでいる人々の気持ちを考えることも必要ありません。「インタープリテーション」と「プレゼンテーション」として「コミュニティ」。遺産を継承していくためには、この3つを包括的に取り組んでいくことが大切だと思います。

若い人には新しいものだけでなく、伝統的なものにも目を向けてほしい。



セシリヤ・カルデロン・プエンテ(メキシコ)
イコモスCIRC専門委員、イコモスCIRHIB共同委員、イコモス・チワウ支部担当。カリ・コンサルタントCEO。チワウ工科大学建築学部教授。建築学博士(メキシコ国立自治大学)。

新世代とともに文化遺産をどのように保全するかについてお話しします。新しい世代、若い人たちと話をするのは、時によつてとても難しいと言われています。私たち大人が唯一できることは、彼らが必要とするときに、その場においてやることです。そういった場所として学校があると思います。

若い頃、私は文化遺産についてわからないことだらけでした。いろんな人々に質問を投げかけてみましたが、誰も確たる答えを出してはくれませんでした。そうした経験から、私は教師になりました。論理的な視点、専門的な意見によつて、市民の声を反映するネットワークを作り、マスメディアの応援を得られれば、社会で必要なものが政府の計画レベルまであげることができそうです。

2年前のことですが、建築学部の学生を対象に「TIR(ティア)」という文化財の総合的なワークショップを意味する講座を開設しました。このアイデアが学生たちの中で評判になり、今ではこの研究への参加を希望する学生が、常に予約リストに名を連ねるほどになっています。

現在、大学では約300人の学生に教えています。私が担任のクラスから、このほど10人の学生を

選出し、歴史的な文化遺産の保全について、10週間の研修をしました。また、さらに5人の学生に絞り込んで、ある山岳地帯の市民組織で、一般の方々と一緒に保全活動を行いました。

こうした若い世代との取組は、とても重要なことなのです。なぜなら、そうやって保護活動を進めていくことで、文化遺産を後世に永久的に伝えていくことができるからです。学生たちも今では遺産を保全することの重要性を認識し、彼らの口からそれを話すようになってきました。

その後、地元の市と大学院卒業生と協力して20のプロジェクトを作りました。このように、新しい世代のための教育をすることによって、文化遺産のニーズと考える方が将来に伝えられていくと思います。

若い人々の力を結集させて、コスタリカの歴史街道を守っていききたい。



カルロス・メセン・リース（コスタリカ）

元イコモス本部執行委員、元コスタリカイコモス国内委員会委員長。建築、修復、文化プロジェクト及びコスタリカでの文化観光活動、コヒー事業、農業観光における民間コンサルタント。

コスタリカには、「ハードロード」という古い道があります。私は、その歴史的な道のネットワークの保全にあたりながら、大学の学生や若い人たちに、文化遺産の保存の重要性を説いています。

スペインの植民地時代、コスタリカではまず道路のネットワークづくりが始まりました。中央の溪谷地帯を縦横に走らせたもので、カリブ海、太平洋との港を結びました。この頃の道路というのは、たくさんある村を通ってあります。先住民によって使われました。そして、いろいろな品物が運ばれたわけです。内陸のものを港に運んだり、その逆もありました。私どもの国では、地理的な条件もあって、こうした道路で使った作業は、そうスムーズなものではありませんでした。

1744年には、エル・カミノ・レアルが拓かれました。そして、内陸の道路が谷を通ってつくられました。冬には雪に覆われ、夏には雨に苦しみながら、この道路を人々は馬を使って通ったわけです。

こういった歴史的な条件が、今ではまったく反対に解釈されています。昔と同じ季節的な変化を帯びた雨林というのは、今では非常に

光客を惹きつける場所となっています。また、生物の多様性といったことも魅力となっています。

コスタリカの文化に、最も影響を与えたのはスペインです。1519年にニコヤ湾（グアナカステ州）に遠征隊がたどり着いています。開拓が始まったのは、スペイン人の本拠地がつくられてからで、そこから歴史的な道のネットワークであるハードロードが始まったのです。

ハードロードができると、そこから北の道や中米の道のネットワークができました。中米の道の南側には、「エルドラド」という黄金郷があり、自然と人々が集まるようになりました。実は、そのような宝物はなかったのですが、立派な道ができました。また、豊かな領土をめぐって、宗教学問の衝突もありましたが、今では観光が非常に盛んになっております。密林を旅するといったようなツアーもありません。

ところが、最近、このルートの道の保存が問題になっています。国とユネスコが協力することによって、この道を保全していくことが必要です。いろいろな人々にも、そのことを認めてもらいたいと思っています。

文化遺産は継承するものではなく、若い世代と共有することが大切です。



秋吉久美子（日本）

女優。1974年、藤田敏八監督の「赤ちやうちゃん」(「妹」)「パーリンブルース」に出演。アジア映画賞主演女優賞、ブルーリボン賞主演女優賞などを受賞。2009年、早稲田大学政治経済学術院公共経営研究科を卒業。

90年代、サミュエル・ハンチントン博士は、イデオロギーではなく、宗教などの文明の違いによって、摩擦や衝突が生じると指摘しました。アイデンティティとアイデンティティがぶつかり合う時代。そういう時代の中で、じゃあ、日本人のアイデンティティって何なんだろうと、私は素朴な疑問を持ったわけですね。

そこで、大学院の修士論文のテーマとして、世界遺産になった熊野を研究することは意義があるんじゃないかと思つて、熊野にフィールドワークで訪れました。

まず、最初に花の窟へ行きました。ここは日本という国を生んだ母神イザナミとその子で火の神カグツチのお墓だということです。もしかしたら、私たちを生んだ女神は、火の神すなわち近代を生むことによつて、この地で亡くなったのではないのでしょうか。そんなふうには花の窟で感じました。自分たちのアイデンティティを懐かしむ場所というのは、こういうところかも知れない。そういうスピリットが集約されているということを感じたんです。

また、本宮大社に向かうために、熊野川に沿って動いたのですが、その川の美しさに感動しました。私は30カ国以上のいろんな国に行

ったことがあります。でも、熊野川を見たときの感動は、ガンジス川を見た時と同じくらい大きなものでした。昔から人々は熊野川の辺を歩き、大自然のスペクタクルの中で、自分の人生、身体を通して、死後の世界までをイメージする。自分の人生を考えたり、死に向かい合う時の大きな知恵が熊野一帯の自然にあったのではないのでしょうか。

そういう意味でも熊野古道は素晴らしい、時間を甦らせるための道としても、私は非常に重要なものだと感じました。

紀伊山地の吉野、熊野、高野山。この修験や神道や仏教が融合することに抵抗もなく、それぞれの個性を持ちながら融合して、それが今日まで続いているわけです。かの博士の言葉によつて危惧されている問題も、この熊野古道のあり方の中に、その答えや哲学があるのではないかと。最近、そんなふうには思いついていないところですね。

はなじり
花尻 薫 (日本)



三重県立熊野古道センター長、熊野古道語り部友の会会長。
三重大学教育学部卒業、昭和28年より教職に就く。昭和52
年に市教育委員会社会教育課に着任し、それを契機に熊野
古道伊勢路の発掘活動を始める。

地元の尾鷲中学校の生徒と一緒に、来月、世界遺産の勉強会を開きます。

世界遺産の「紀伊山地の霊場と参詣道」は、その「文化的景観」が評価されたわけで、まさに熊野の価値が高く評価されたのです。この熊野の人々の暮らしの中で、知らず知らずのうちに互いが支え合い、守り続けてきたものが、世界遺産という大きな評価を得ることができたわけです。

しかし、保存活動の取組も担い手の高齢化や資金面での限界が懸念されるようになってきました。そうした中で、今日、世界からたくさんの方々が、この熊野に関係者の方々が、この熊野に来てくださって、いろいろなお話を聞きましたことは、誠にありがたいことだと思っています。

特に、外国からの3人の方々からは、それぞれの国における貴重なご意見を伺うことができました。お三方とも世界遺産を若い人たちに、どうやって伝えていくかという、かなりレベルの高い目標をお持ちです。

実は、私たちにも明るい話題はあるのです。尾鷲中学校の1年生・2年生が、熊野古道伊勢路のことを勉強したいので、語り部友の会の皆さんにお願いしたいという申し出があったのです。それで来月、私は5学級

150人と一緒に、世界遺産の勉強会を開きます。その後、伊勢路のいくつかの峠に出て勉強して、次はお客さんを案内できるようにしたいと、みんな意欲に燃えています。

若い世代と一緒に行動することが大事という、皆さんの言葉に勇気をいただきました。「明日から熊野古道のために、また頑張るつもりです」と改めて思いました。

今日は、いろいろなお話が聞けまして、本当に良かったなと思っています。ありがとうございます。

コーディネーターまとめ

地域の文化遺産は継承するものではなく、若い世代と共有していくことが大事なんです。

このセッションの外国からの参加者は、キューバ、メキシコ、コスタリカと、全員が中南米の方たちでした。そういう意味においても、将来への継承セッションは非常に興味深いものになったと思います。

まず、キューバのアンジェラさんからは、文化遺産のインタープリテーションとプレゼンテーションの方法について語っていただきました。道や文化的景観というものは、さまざまな要素が揃ってはじめて道であり、文化的景観と言えるわけです。そうしたものを五感を使ってどう伝えていくか。アートや文学、あるいは人を通じて、どう伝えていくのか。従来からのパネルだけではなく映像を使うなど、いろいろな方法があるということをお話いただきました。

メキシコのセシリヤさんからは、若い人たちをどうやって巻き込んでいけばよいのかと、大学での実体験に基づいて語っていただきました。熊野古道でも三重大学の先生が、とても頑張っておられます。そういう若い人たちを巻き込んでいくやり方は、とても大切なことだと思えます。

カルロスさんのお話しされたコストリカの道は、日本の熊野古道とはちよつと違うタイプの道です。道の伝え方、道の要素、道はどうできているのかということについて、改めて考える良い機会になりました。



いなかのぶこ
稲葉信子 (日本)

秋吉さんは、熊野古道について「失われた時間を取り戻す道」とおっしゃっていました。本当にその通りだと思えます。私たちは近代を手に入れたけれども、何かを失ったのでしょね。でも、その近代との間にあるものを追究していくことが、文化遺産の仕事だと私は思っています。その中でも、道はそれを象徴するものではないでしょうか。

また、秋吉さんは「地域の文化遺産は、引き継ぐものではなく、共有するものだ」とおっしゃっていました。若い人たちと同じ時代を生きるということが大切なんですよ。私も、この言葉を大事にしていきたいと思えます。

地元から参加の花尻さんからは、尾鷲中学での予定を語っていただきました。こうした取組は、いろんな国で行われていると思うんです。その主たる仕事に携わっている方々を世界中からお呼びして、それぞれのノウハウを語っていただくと、きっと面白いことがいっぱい聞けるのでしょね。熊野古道センターの将来の計画として、ぜひ、このプランを取り入れていただきたいと思えます。

イコモス国際トレーニング委員会委員、筑波大学大学院人間総合科学研究科教授、工学博士。専門は文化遺産の保存及び建築史。遺産の概念、保護の理念から政策に至るまで、幅広く各国や国際機関の動向について比較研究を行っている。日本ユネスコ「国内委員会の委員」でもある。

分科会 保存管理セッション

この世界遺産は、どうやって守っていけばよいのだろう。



観光に力を入れるより、地元の暮らしを尊重することが大切です。

アルゼンチンの「ウマワールカ渓谷」は、「インカの道」につながっています。そして、スペインの大陸を結ぶ「王の道」にもつながっています。

遺産という観点から見ると、ここには多様な遺産の要素があります。まず、自然については標高1200メートルから3000メートルの渓谷です。土地が不毛で、気候が非常に乾燥していることから、土地も乾燥しています。もう一つの特徴は、多種多様な鉱物があるので、山によって色合いが違います。

この渓谷を文化という観点から見ると、南の方のアンデスの高原で、1万年にわたって交通を結びつけてきた場所でした。先住民のコミュニケーションの場所であり、またスペインが支配した後は道路網となりました。

文化的な景観も広がっています。谷に沿って川が流れているので、乾燥した土地でも農業が盛んです。また、古代遺跡もあります。宗教的な建造物の遺産や歴史的な村もあります。さらに、インカとスペインの伝統が融合した無形遺産の儀式も見られます。

ここでは1940年代から



アルフレッド・コンティ (アルゼンチン)

イコモス本部執行委員。アルゼンチンイコモス国内委員会委員長。前イコモス副会長。ラプラタ大学教授。歴史的遺産の国家委員会アドバイザー。ラテンアメリカの世界遺産を評価・監視する専門委員として活躍している。

保護活動が始まっています。1970年代に村全体が保護の対象となり、2000年に景観の保護が宣言され、2003年には世界遺産リストに登録されました。それに伴って外国からの観光客が急激に増加し、この6年間で観光客の数は、実に15倍にもなっています。

こうした中で、州政府はますます観光業を奨励しています。所得の高い観光客を誘致したり、アトラクションの多様化を図ったり、施設やサービスの質を上げることに力を入れています。また、新しい宿泊施設もつくられました。それでもまだ不足しているのが、伝統的な農業の土地にまで拡大しています。

今までなかったような新しい事業もあります。たとえば、観光バスの駐車場や宣伝物やゴミ対策。こうしたものも地元当局は管理しようとしています。当然、地元の共同体は、このような観光客の増加を喜んでいません。私は、もっと地元の人々の暮らしを尊重していくことが大切だと思います。

先住民の歴史のストーリーを記録することが重要です。

オーストラリアの文化の道には、いくつかの大きな特徴があります。まず、何よりもスケールが大きいということ。そして、世界で最も乾いた土地であるため、すべては水を求めての道であるということ。また、文化の道の中には、いろいろな価値や文化の多様性が、互いに重なり合っているという特徴もあります。

その中でも「キャンニング・ストック・ルート」は古くから伝わる道です。西部の砂漠地帯から南北にまっすぐ伸びる一本道で、全長約1700キロメートル。オーストラリア先住民アボリジナルの通商交易ルートとして、何千年も使われてきた道です。

その後、ヨーロッパから入植した人々は、豊かな水と牧草地を求めて、昔からあった道をたどり、彼らはアボリジナルの水源地を見つけたのです。

私はオーストラリア国立大学に勤務し、現在、アボリジナルの協力を得ながら、このルート沿いのさまざまな研究調査を続けています。もちろん、それ以外の人々とも仕事をしています。こういった共同研究によって、この地方における豊かな歴史



サンディー・ブレア (オーストラリア)

イコモスCアジアパシフィック地区副会長補佐、オーストラリアイコモス国内委員会委員。遺産コンサルタント。専門は歴史学。オーストラリア国内及び世界的に文化遺産の保全・管理研究を行っている。

史、アボリジナルの3万年にわたる歴史が、だんだん明らかになってきました。

また、アボリジナルの土地管理者と一緒に、私の大学では評議会を作りました。その評議会を通して、こういったものを研究して、文書化して、記録するという協力プロジェクトをスタートさせました。熊野古道でも道の歴史を記録したりされていますが、アボリジナルの人々もストーリーの記録ということにはとても熱心です。また、こうした記録によって、雇用が生まれ、自分たちの文化や遺跡に対して、とても誇りを持つようになりました。

いずれにしても、保存管理にあたっては、いろんなコミュニティ、いろんな文化グループを巻き込むようなプロジェクトが必要です。また、学際的なアプローチが必要なことから、いろんな分野の専門家を巻き込むことが重要だと思っています。

遺産登録地の都市開発と世界遺産の保存について考えることが必要です。



ビクター・フェルナンデス・サリナ（スペイン）

イコモス（ICOMOS）メンバー、セビリア大学都市地理学・遺産学教授。地理学博士。主な専門テーマは、歴史都市、遺産と都市と領地の関係、文化の遺産、文化的景観、アンダルシアの景観地区における文化遺産の特徴について、現在、総合コーディネーターとして研究に関わっている。

サンティアゴ・デ・コンポステーラでは、世界的に有名な建築家であるピーター・アイゼンマンによるプロジェクトが進行中です。

ところが、これが思わぬ2つの問題を巻き起こしているのです。一つは、文化センターの建設。そして、もう一つは、施設と都市の中心部を結ぶケーブルカーの建設。どちらも都市景観に大きな影響を及ぼします。

しかし、市議会の考えは変わることもなく、これらの建設の必要性を説いています。特に、ケーブルカーの建設は、近くの文化都市へのアクセスを可能にすることをめざすとしています。そのため、駅と交通ハブをケーブルカーで結び、将来の高速鉄道に備えようというかなり大がかりな都市計画になっています。

これは遺産という問題だけではなく、都市機能全体に影響を及ぼすものです。また、文化的な側面にも大きく影響するものでもあります。駅と交通ハブ、そして文化都市、歴史的センターなど、周辺の施設とのバランスをトータルに考えなければいけません。さらに、文化都市と実際の歴史的センターとの間での流れを予想しなければいけません。

ん。そうすることで、この場所がどんな文化的なプロジェクトが具体化するか、ということを持握していく必要があります。

従って、ケーブルカーのような高価なインフラをつくる際には、今の状況を考えるとまだ早過ぎると言えます。サンティアゴのコンソーシアム（組合）と市議会の担当者は、ケーブルカーに対する市民の意見に、もつと耳を貸す必要があります。

もし、サンティアゴが先進的、学術的な力を否定し、中心地にある農村の特徴を否定し、ますます観光地になり、有名な建築家によって新しく造られた建造物とケーブルカーを特徴とした、地域的な行政センターになるのであれば、世界遺産そのものの真正性さえ失うことになるかもしれません。

行政とボランティアの役割分担をこれからどう進めていけばよいのか。



小倉 肇（日本）

紀北町教育長。みえ熊野学研究会運営委員長、紀北民俗研究会会長、熊野古道語り部友の会顧問、日本児童文学者協会会員。三重大学学芸学部卒業。県尾鷲教育事務所長、小中学校長を歴任。

三重県側の伊勢路が世界遺産になるうとは、ほとんどの人が思いもよらなかったと思います。

しかし、世界遺産の候補に指定されてから、もう一度、伊勢路を見直してみようという運動が起こって、花尻先生がご提案された形で、官民一体で語り部の養成への取組が始まりました。これが現在では237名を抱える組織となり、他の地域では見られない大きな動きに発展しています。

また、地元の教育委員会としても、カリキュラムの中に、地域の熊野古道は中学校卒業までにほとんどの峠を歩こうということ提案しまして、各小中学校で遠足や学級行事などで歩くようにしていただいたわけです。

こうした動きが活発になると、峠の麓に住む人々は、みんなが歩きやすいようにと、自主的に道の整備にあたり、土に埋もれていた石畳の道があちこちから出てきたりしました。

しかし、こうした官民一体の保存活動にも、やはり解決できない問題があります。地元の人々の「守る」という善意だけでは、この大きな仕事は完成できないわけです。たとえば、台風などで大雨が降って、被害が出て道

の修理が必要となった時に、ボランティアの労力だけに頼るわけにはいかないのです。

つまり、行政の役割とボランティアの役割をどうするのか。どこまでが行政の役割で、どこからが協力してやることなのか。もう少し明確にしておく必要があると思います。また、パトリオルの要員を公費で雇っているような海外の事例をお聞かせ願えればと思います。

それからもう一つは、私有地の問題です。世界遺産の熊野古道の両脇は私有地の民有林です。町は景観条例をつくって、コアゾーンは絶対に変えない、コアゾーンの両側50メートルずつのバッファゾーンにある木を伐採する際には届出をいただく。そういう姿勢を進めています。林業事業者などの事情もあって、バッファゾーンの管理はなかなか難しい問題を抱えています。こうした私有地の問題について、海外での良い事例がありましたら、ぜひ、教えていただきたいと思っています。

文化的景観の保全と道の管理、そして伝統技術をどう再生するのか。



辻林 浩(日本)
和歌山県世界遺産センター長。明治大学大学院修士課程(考古学専修)修了。1971年に和歌山県教育委員会に採用。2000年に同県世界遺産登録推進室長に着任し、「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録に尽力する。

私からは3点ほどお話をさせていただきます。

まず、「文化的景観」の保全の問題です。山の中はともかく、市街地に入った時の景観は、今のままで良いのでしょうか。やはり一番大きな問題は広告物だと思います。

住宅などの建物については、ある程度条例で規制はできるのですが、広告物についてはなかなか思うように規制が進みません。これが文化的景観を劣化させようとしている一番の原因じゃないかと思っています。その辺を今後はどうしていくのか。そういう問題があります。

次は、「管理」に対する問題です。世界遺産になる前の保存状況が、どうだったのかという問題もあると思います。「中辺ルート」と呼ばれているところでは、昭和50年代に古道の整備を行っていたのですが、これが非常ににまじりやり方をしていました。路面を一定の深さで掘り込んだり、もともとちゃんとした階段があるのに、また新しく階段を作り直している。しかも石をコンクリートでとめるという、無茶な整備をやっているんです。

これを元に戻そうとすると、文化財保護法の現状変更にあた

るといいます。こういう問題をどうやって解決していけばよいのか。いろいろ考えると、非常に頭が痛いわけです。

3つ目は、失われた「伝統技術」をどう再生するかという問題です。かつて、この近くの農村部では紙すきが盛んで、「音無し紙」と呼ばれる和紙は、本宮の土産物にもなっていたそうです。この紙すきの道具が一式だけ完全な形で残っていたことから、世界遺産登録を機に、何とか元に戻せないかと地元の方に声をかけて紙すきの技術を習得してもらいました。そして、ようやく今年、紙がすけるようになりました。

こういう伝統的なものが、まだまだ、この地にはあるように思います。そういうものを探して、これから先、どのように伝承していくか。そういう問題も、この文化的景観の中に、大きなウェイトを占めているのではないかと考えています。

コーディネーターまとめ 世界遺産の保存管理は 行政主導ではなく地域の人々が 参画して行うことが大事です。

アルゼンチンのアルフレッドさんのお話は、インカの道に通じるウマワール渓谷を事例に、保護される文化遺産は、建造物レベルから村落レベル、最後には文化的景観と進化していくということでした。

オーストラリアのサンディーさんの地元を重視したお話には共感しました。文化遺産の保存管理は行政が主導するものでなく、地域の関係者全体を巻き込むようなプロジェクトや、関連分野の専門家等による学際的なアプローチが必要だということでした。先住民であるアボリジナルの文化を理解したうえで世界遺産をめざしていくということでした。また、世界遺産の保存管理によって、地域の経済的効果が損なわれないよう留意したいというお話もありました。

ピクターさんは、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラのご報告でしたが、都市レベルでいろいろな開発の影響があり、サンティアゴ市内の都市計画の変更も大きな問題だということでした。都市計画の変更、条例による規制強化なくして世界遺産の保存管理、継承は困難であるという、都市開発と世界遺産の保存という問題を提起されました。

小倉先生からは、地域の住民は一生懸命やっているが、保存管理という面では地域だけの力では限界であ



杉崎 邦江(日本)

る。やはり行政も何とかしないと困るということでした。地域のボランティアと行政の役割をどう分担するかという問題提起がありました。

辻林先生は事例を交えて、地域の伝統的な工芸技術を継承していかなければいけないとお話されました。会場からは、伝統技術を継承するにあたっては、昔と同じプロセスを継承すべきであるとのお声をいただきました。

世界文化遺産は、資産を構成する有形遺産と同時に無形遺産の両方が継承されなければならないということだと思っています。

このセッションをまとめると次のようになります。

世界遺産の保存管理には、地域の関係者の参画のもと、多様な人々と、学際的な研究をしていかなければいけない。問題を共有化して、地域に整合した保存管理、継承への指針を作成し実行していく。保存管理計画は地域の特性や経済効果に配慮し、地域の適切な成長、活性化に結びつくことを考えていく。それによって、アルゼンチンの事例のように、文化遺産は地域と共に進化していく。

イコモス(CIC)日本代表、日本イコモス国内委員会理事。(株)プレック研究所代表取締役副社長。農学博士。環境、文化関係のコンサルタンとして日本の世界文化遺産・自然遺産の多くの登録申請業務、保存、保護業務に携わってきた。

熊野の魅力は 文化的景観だけではない。

イコモスの会長は、今日、アメリカからお着きになられたとか。20時間の長旅で、ほんとうにご苦労さまです。私も夕べ東京から来ました。この熊野の地はとても遠いところで、7時間もかかりました。国内で7時間ですから、アメリカから20時間かかるのは当たり前ですね。

そのような遠い地である熊野ということ、さぞかし寒いだろうなど思っただけでまいりました私は、冬用のコートを着込んで来ました。しかし、あまりの暖かさに、昨日も今日もコートが必要ありませんでした。

考えてみれば、北海道を最北端として、沖縄を最南端とするのではなく、日本地図を縦軸で眺めて見ると、この熊野の地はかなり南に位置しています。

北風さんの話があります。人はどうやって硬い心を柔らかくするのか、心を開くのかと言え、お日様の力が大事だという逸話があります。熊野の地に來るにあたって、私はしっかりコートを着込んでまいりましたが、この地の人々の温かさや優しさ、

そして素朴な心に触れることによって、コートを脱ぐことができました。熊野の魅力は、何も文化的景観だけでなく、まさにこういうところにあるのだと思います。

さて、私たち日本人は、日本の武士文化を日本の文化だと思っっていますが、それよりもはるか昔から熊野には温かくて素朴で、そして他からの進入を決して拒まない大らかな文化が続いてきたわけですね。吉野・金峯山寺の田中総長もおっしゃっていましたが、神道、仏教、修験の3つの霊場が道を通じて結び合い、互いに融合しながら生きてきた熊野のあり方は、今の日本人、そして世界の人々が学ぶべきところがたくさんあると思います。

熊野には日本人の 帰るべき場所がある。

私たち日本人は、宗教に対して違和感を感じる傾向があります。その背景には明治維新の、神仏習合から神仏分離への転換に要因があるように思います。これによって日本独特の神仏習合の慣習は禁止され、神道と仏

熊野古道は時間を取り戻す道。 私たち日本人の帰るべき場所がある。



秋吉久美子 (女優)

教、神と仏、神社と寺院と、はっきり区別することが要求され、日本人の宗教観というものが、バラバラになってしまったのではないのでしょうか。

だから宗教心は大事だけれども、宗教を持つことは危険だ。そういう意識の中で、アイデンティティの揺らぎの時代に私たちは生きています。そして、政治も経済も、医療や介護の問題も、とにかく不安なことだらけ。平均寿命は延びているけれども、この先、どう生きていきたいのか、いくつまで健康でいられるのか。いろいろな不安を抱える中で、私たちの日本人の帰る場所は、まさにここ熊野にあるように思っています。

熊野の文化を守りながら、いつも温かく迎えてくださる皆様には、本当に感謝しております。ここに來ると、なぜか心がとても癒されます。

でも、「継承」という言葉の中には、その途中で途切れる時もある、そんな意味合いを含んでいるんじゃないかと、ちよつと不安に思うこともあります。しかし、ここ熊野では大人から子どもまで、みんな含めて一つの共同体として、世界遺産にちゃんと向き合っ共育し、地域活動をしています。

うことを修士論文のフィールドワークで、私は強く感じる事ができました。

かつて貴族たちがこの地を何度も訪れ、白河天皇や後白河天皇、鳥羽天皇や後鳥羽上皇もこの地を求めて都からやって來られた。そして蟻の熊野詣と言わるほど多くの人々が、自然の曼荼羅のようなこの地を訪れた。生死のボーダーラインを引かずに、人間が生きていることを求めた熊野の歴史は、今、1500年に届こうかという時を迎えています。

熊野、吉野の山々で歴史が始まり高野山が開かれたその昔、こんなにもたくさんの方々が一堂に集まって、かくも盛大に国際交流シンポジウムを開くなんて、いったい誰が想像したのでしょうか。そう考えると、とても感慨深いロマンのようなものを感じます。

このシンポジウムを開催するにあたっては、多くの皆様方のご尽力があったはずでございます。本日はおめでとうございませす。私も日本人の一人として、熊野がいつまでも熊野であることを心から願っております。いつも無私の精神で熊野を守ってくださって、本当にありがとうございます。

このシンポジウムの開催は、 地域の皆さんのおかげによるものです。

熊野古道協働会議代表世話人
花尻 薫



本日は、熊野古道国際交流シンポジウムに、たくさんの方々にご参加くださりまして、ありがとうございました。

私どもが熊野古道協働会議を結成してから、早くも5年が経過しました。熊野古道の文化的景観を保存し、より多くの人々を導くために、この伊勢路では民間と行政が一体となって、これまでさまざまな活動をしてきました。そうした皆さんの熱意が、伊勢路の世界遺産登録の大きな力となり、本日の素晴らしいシンポジウムを開催する原動力にもなったと思っています。

世界遺産登録5周年という節目に、こうして世界から、日本国内から、有数の専門家の方々をお迎えし、貴重なお話を聞かせていただける機会に恵まれたことは、誠に意義深く、将来に向けて最も重要な一つの大きな転機になることと思います。また、世界遺産の「紀伊山地の霊場と参詣道」が、国内はもとより世界に向けて大いに発信できたことは、本日の大きな成果であります。

最後に、このシンポジウムを開催するにあたりまして、特に三重県の東紀州対策局、三重県教育委員会の方々のご尽力には、改めて厚くお礼を申し上げます。また、この広い会場で長時間にわたって、このシンポジウムを支えるためにご参加いただいた皆さんにも、この場をお借りして厚くお礼を申し上げて、私の閉会の言葉とさせていただきます。どうもありがとうございました。



文化的景観の世界遺産、
熊野古道伊勢路の光景



一石峠



ツツラト峠・熊野灘



熊谷道



荷坂峠



八鬼山越え



馬越峠



曾根次郎坂太郎坂



二木島峠



羽後峠



始神峠

※掲載されている写真は、世界遺産に登録されていない箇所も含まれます。



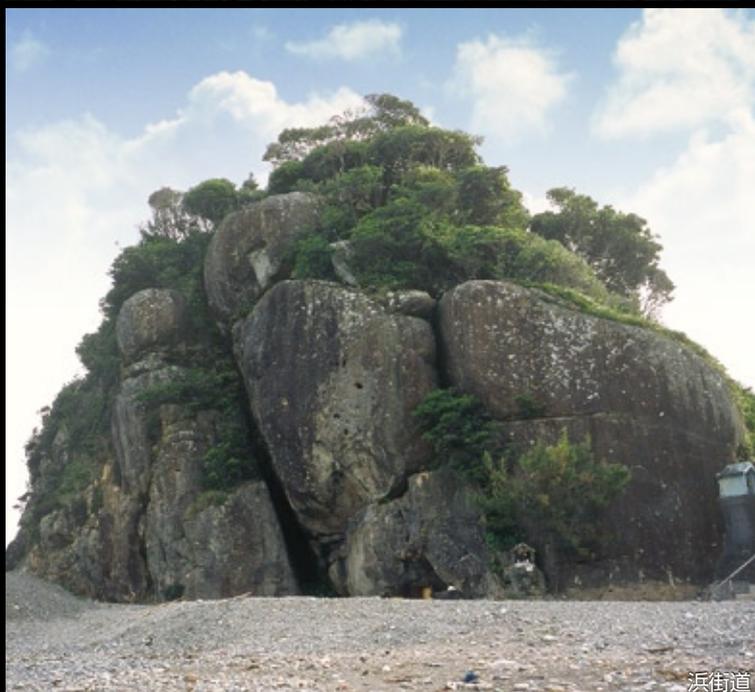
熊野川



横垣峠



松本峠・七里御浜



浜街道



観音道



波田須



風伝峠



本宮道



通り峠・丸山千枚田



猪ノ鼻水平道



逢神坂峠



世界遺産国際交流シンポジウム
 伊勢2009
 これからの
 世界遺産の
 意義を問う

Ise 2009
 11.1

開催場所 賓日館 ひんじつかん 9:00 ~ 19:00 (開場 8:30)

主催：世界遺産国際交流シンポジウム伊勢2009実行委員会(イコモスCIIC、日本イコモス国内委員会、三重県)
 共催：奈良県、和歌山県、伊勢市
 助成：(独)国際交流基金、(財)文化財保護・芸術研究助成財団、(財)岡田文化財団、大成建設自然・歴史環境基金
 後援：外務省、文化庁、尾鷲市、熊野市、多気町、大台町、玉城町、大紀町、紀北町、御浜町、紀宝町
 協賛：伊勢角屋麦酒、「美し国おこし・三重」実行委員会、麒麟ビール(株)三重支社、
 キリンビバレッジ(株)中部圏地区本部、元坂酒造(株)
 協力：(株)朝日館、(有)伊勢文化舎、縁側サミット、NPO法人二見浦・賓日館の会、三重大学ユネスコクラブ、南川三治郎

伊勢は日本の精神文化の原点であり、
また出発点になっている
場所でもある。

奈良県知事
あら いしやう ぎ
荒井正吾



イコモスの関係者の皆様のご来日を心から歓迎申し上げます。また、このような国際的なシンポジウムが、ここ伊勢の地で開催されますことを、心からお喜びを申し上げます。

さて、奈良県は、日本で初めて本格的な首都・平城京が誕生してから、来年で1300年になります。また、私どもの県には、吉野・熊野を含めて3つの世界遺産があります。

これらの日本の文化、奈良時代の文化には特徴があります。たとえば、日本には仏教という文化が根づいています。この仏教は紀元前6世紀にインドで発祥し、中国から日本に伝わって来たものです。そのようにシルクロードを渡って来た文化が、日本に根づいたという歴史があります。

一方、この伊勢神宮のように、日本の伝統的文化が併存して、現在に生き残っている特徴があります。

つまり、文化の伝播と受容のパターンが、日本の文化の大変特徴的なものではないかと思えます。その一番の例が、宗教が大変主張しあう今の時代における神と仏の習合、「神仏習合」の文化だと思えます。

ここ伊勢の地は、日本古来からの精神文化の一番の基本となる出発点であります。また、奈良は伝わってきた仏教が最初に到着した地であります。そのような異なる文化が、波状的に連続して長い間伝わることによって、日本の文化が形成されてきたわけです。

このような国際会議を三重で開かれることを心から歓迎し、また感謝を申し上げて、私のご挨拶にさせていただきます。

これからの世界遺産の
意義が得られる成果の大きい
シンポジウムにしてほしい。

日本イコモス国内委員会委員長
まえ の まさる
前野 巖



本日は、日本イコモス国内委員会の代表として、皆様にご挨拶申し上げることができまして、大変うれしく存じます。

また、「世界遺産国際交流シンポジウム伊勢2009」の共同主催者として、このシンポジウムをなんとか成功させたいと、改めて大きな責任を感じています。

昨日は、「文化の道を探る」と題し、三重県の主催で「熊野古道国際シンポジウム尾鷲2009」が、尾鷲市の県立熊野古道センターにおいて開かれました。ここでは野呂三重県知事、中川文部科学副大臣、イコモス会長のグスタボ・アローズさんのご挨拶に続いて、基調講演としてイコモスCIIC会長のマリア・ローザさん、それから金峯山修験本宗宗務総長の田中利典さんのお話がありました。

さらに分科会では、世界遺産の地域活性、継承、管理について、各国の委員の皆様のご貴重な体験が語られました。

尾鷲でのシンポジウムでは、田中宗務総長さんの熱のこもったお話に、特に私は深く感銘しました。紀伊山地の3霊場（吉野・熊野・高野山）のそれぞれ異なる宗教が、道によってつながってきたのは、沿道の平和が保たれてきたからで、道がつながっていくためには、平和が必要なんだというお話は、この伊勢でのテーマである「世界平和の構築」にも、大きくつながるものと確信いたしております。

今日は、イコモスの文化の道の専門機関であるCIIC（文化の道国際学術委員会）の皆さまにも、多数ご参加いただいております。このシンポジウムを通じて、これからの世界遺産はどうあるべきなのか。また、世界平和の構築に寄与する世界遺産とは、どういうものなのか。皆様の盛んな討議によって、大きな成果が得られますことを心より願っています。

古の文化を綿々と伝える伊勢の地で
世界遺産と平和のことを
考えることは意義深い。

三重県知事
のろあきひこ
野呂昭彦



昨日の尾鷲市でのシンポジウムに引き続き、本日はこの伊勢市でシンポジウムを開催することができました。イコモスの関係者の皆様には、連日の厳しい日程でお世話になり、厚く御礼を申し上げます。また、奈良県、和歌山県の知事にもご列席いただき、深く感謝申し上げます。

当地伊勢には古から日本を代表する伊勢神宮がありますが、この神宮はいわゆる文化財ではありません。20年毎にご遷宮が行われ、あらゆるものがリニューアルされるからです。それは神宮を象徴する「常若」という言葉からもわかります。常に若いという意味で、英語で直訳するならば、always fresh and young とでも言うのでしょうか。2000年前の文化を、常にフレッシュでヤングな状態で、今日まで伝えてきました。

また、伊勢の地は「美し国」と古来から言われてきたところですが、神宮にお祀りしている天照大神が、ここは美しい国だと言われたという故事に由来しています。本県では、わが郷土をいつも美しい国にしていこうと「美し国おこし・三重」という取組をはじめたところで、この国際会議もそのオープニングイベントに位置づけております。

ここ伊勢の地と熊野を結ぶ道が、世界遺産にも一部が登録されている熊野古道伊勢路です。熊野もわが国を代表する古からの信仰の地であり、近世では伊勢をお参りされた多くの方が、熊野に向かったという記録も残っております。

こうした三重の地におきまして、イコモスの専門家の方々が世界遺産と平和についてご討議いただくことは、誠に光栄なことでございます。ここ伊勢から世界平和を訴えることができますならば、世界に対して大きなインパクトをもたらすものと思っています。また、熊野古道という、道の世界遺産の意義も認識も新たにして、未来へしっかり継承して行きたいと考えています。

本日のシンポジウムの成果多からんことを心からお祈りして、私のご挨拶にさせていただきます。

1000年間続いた世界遺産を
後世に伝えていきたい。

和歌山県知事
にさかよしのぶ
仁坂吉伸



熊野古道の歴史を振り返りますと、ここ1000年の歴史の後半は伊勢路が非常に盛んだったように思います。特に江戸時代には、全国からたくさんの人々がお伊勢さんにお参りに来ています。その後、熊野にもお参りしようと、人々は熊野三山、すなわち本宮大社、速玉大社、那智大社へと向かったわけです。この伊勢の会議の後、イコモスの皆様には熊野三山にもお出でいただき、本宮でもシンポジウムを開くことになっており、私も楽しみにしています。

和歌山県は、スペインのガリシア州と姉妹提携を結んでおります。ここにはサンティアゴ・デ・コンポステーラがあって、互いに「道の世界遺産」を持つ同士ということで、11月4日には和歌山市において、シンポジウムを開催することになっています。

私は、この2つの道をどちらも歩いておりますが、汗をたらして、苦勞して、やっとの思いで目的地にたどり着く。人はそういうことでよみがえり、救いが得られるように思います。これからも魂の救いを求めて、「紀伊山地の霊場と参詣道」は人々の心の中で生きていくことでしょう。

行政といたしましては、この素晴らしい世界遺産をいつまでも守っていかなければなりません。そのためには、観光とともに保全というものが非常に重要になってきます。その一環として、和歌山県では新たに景観保全のための条例をつくり、少しきつめの規制を始めています。このようにして、1000年間続いてきた世界遺産の価値を後世に伝えていきたいと考えているところです。

このシンポジウムが実りの多きものになりますよう、心からお祈りを申し上げまして、私のご挨拶とさせていただきます。

イコモスの力を結集して、世界のさまざまな遺産を守ります。

ICOMOS



イコモス会長 グスタボ・アロズ

保存を担保することも世界遺産条約の目的。

イコモスは「世界遺産条約」の3つの分野で活動しており、まず一つ目は、新しい文化遺産の登録です。二つ目は、保存状況について、常にモニタリングをすることです。そして三つ目は、ポリシーとパフォーマンス、そして世界遺産リストを常に実効性のあるものに担保することです。

イコモスには多くの課題があります。その一つが代表性です。ご存知の通り、世界遺産条約の目的は、世界遺産の登録リストを作成することにあります。その登録リストの中に、すべての歴史と自然と人為的な活動を代表させることが謳われています。そのため、イコモスはさまざまな地域の協力を得て、作業を続けてきました。どうということろで不均衡を是正しなくてはならないかということについて、報告書を作成してきました。

しかし、世界遺産の登録リストの中には、まだ不均衡がたくさんあります。特定の国に推薦が偏っているところがあります。その決定権はイコモスではなく、ユネスコ世界遺産委員会にあるのですが、私たちの意見をもっと反映させるべきです。すべての世界遺産候補が均衡した形で推薦され、日本やメキシコ、スペインのような国々の努力が反

映されるようなものにしなくてはなりません。

そして、報告書のもう一つの目的は、いろいろな文化の中で、遺産がどう捉えられているかを知ることです。遺産の役割は、それぞれの地域において解釈が違います。世界遺産に登録すべきものはすべて登録しなければならぬと考えています。

それに加えて、顕著や普遍的な価値とは、何かということの理解をしなければなりません。普遍的な価値はともかくとして、顕著とはベストということなのか、最も代表性が確保されているということなのか、もつと考えていかなければならないと思います。

世界遺産条約の目的は何も史跡や記念物を目立つようにすることではなく、やはり保存を担保することが目的です。

イコモスには世界中に9000人のメンバーがいる。

私は、「グローバルリング・モニタリング・ネットワーク」の構築を提案したいと思います。各国のイコモスの委員会にお願いして、3名から5名の専門家グループをつくってもらって、毎年1回のモニタリングをして、各国の状況について報告してもらうのです。少なくとも1、2年後には、これを実現したいと思っ

ています。

国際協力に関しては、まだ改善の余地がたくさんあります。たとえば、世界遺産の危機リストに載せられると、それを罰則と捉えてしまつて、恥をさらさないでくれという感情的な意見が出てきたりします。でも、そういうものではなく、あれはすべての国々が国際的に協力しなくてはならないという警告なのです。

私たちはアメリカ政府にも訴えかけています。日本においても、一部のODAの資金をそちらに仕向けていただきたいと思つています。また、世界遺産の中で醸成された良い慣習は、すべての国々の登録サイト、さらには登録されていない遺産も含めて広めることも大事なことです。これらをすべて進めるには、イコモス自らの資源の限界を理解したうえで、その資源を効率的に活用しなければなりません。

現在、イコモスには世界中に9000人のメンバーがいて、遺産の保存に関しては最高の専門家たちを揃えています。しかし、まだ十分にいかしきれていないのが現状です。まず、国内委員会に重要な役割を果たしてもらうことが必要です。そして国際学術委員会においても同様です。両者は対立するのではなく、互いに共通の目的を持って、協力し合える環境を整えていきたいと思つています。



また、個々のメンバーの資源と能力と才能を十分理解するため、イコモス会員全員のデータベースを作っています。そのデータベースを活用して、どこにどのような専門家がいるかを把握できるようにします。

私は、イコモスを文化遺産に関する最大の権威を持った機関にしていきたいと思つています。これは優秀な人材を抱えるイコモスだからできることです。そのためにはハンドルを自らの手に納め、先手を打たなくてははいけません。問題や脅威を積極的に探し出して、現場でどんな変化が起きているか特定して、他者から質問される前に答えを提供するのです。イコモスの9000人の力を結集すれば、それはきつと可能だと確信しています。

グスタボ・アロズ(アメリカ)
イコモス会長、アメリカ合衆国イコモス国内委員会事務局長、ベンシルバーニア大学教授(歴史建造物保存、都市保全)、ゲッティ財団建築保全諮問委員、ユネスコ特別研究旧エルサレムの保護委員会委員、ジョージタウン大学建築専攻。

巡礼路

サンティアゴの巡礼路では、
今、3つの大きな問題が起きている。



イコモス文化の道(CIIC)国際学術委員会会長
マリア・ローザ・シュアレツ・イン克蘭・ドウカシ

巡礼道には1000年 以上の歴史がある。

私がよく知っている道は、「サンティアゴの巡礼路」ですので、今日はこの道についてお話ししたいと思います。

サンティアゴの巡礼路は、1987年に欧州会議が初めてのヨーロッパの「文化の道」として宣言しました。そしてユネスコが1993年に世界遺産リストに登録しました。

この巡礼路は、サンティアゴ・デ・コンポステラにある聖ヤコブの墓参りのための道で、その歴史は9世紀から始まっています。中世ヨーロッパでは主要な文化イベントとして巡礼が始まり、これを軸にして、ヨーロッパの国々が交流を図ったという、当時のヨーロッパ巡礼の生きた事例だと言えます。

この巡礼路は、1000年以上にわたって芸術にさまざまな影響を与えてきました。特にロマネスクとゴシック様式の形成と普及に貢献しています。また、その距離はスペインにおいては、822キロメートルに及んでおり、166の都市や町を通っています。また、沿道には文化的価値のある建造物が1800もあります。

この道では全長を通して、すべてのものが保護されています。道の両側の30メートルも緩衝地帯として守られています。しかし、こ

の道は常にさまざまな影響を受けています。その中で3つのケースをご紹介します。

まず、最初は「イエサ貯水池」です。これはスペインの北部にあります。1959年にフランコ將軍が造ったもので、この貯水池によって巡礼路の一部が水没し、現在の道がつけられたという経緯があります。

そして現在、この貯水池の容量を拡大する計画が浮かび上がっています。二つの方法が提案されていますが、どちらもこの道の一部が水没するものです。これは非常に深刻な問題です。地元住民は反対しています。ユネスコの世界遺産委員会これに異論を唱えて、第28回会議で政府の言い分を無効としました。そして、政府は貯水池の拡大を再検討しました。

それによって当初の計画よりも、かなり縮小された計画が出されましたが、スペインイコモス国内委員会は、この再計画にも賛成しませんでした。ところが、世界遺産委員会は、第29回会議でこの再計画を支持してしまいました。CIICの専門家、あるいはスペイン国内委員会の専門家には、何も相談せずに決定してしまったのです。そのことが今でも悔やまれてなりません。

他にも残念な計画や 決定がいろいろある。

次は、サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサダからブルゴスに向かう高速道路の建設です。これが巡礼路と並行する形で進められています。既にいろいろな問題が出てきております。このダメージは不可逆的なものです。イコモススペイン国内委員会は、代替案を提案したのですが、公共事業省は数カ月後にこの提案を却下してしまいました。

三つ目は、レ・オピノの工業団地の建設です。これはサンティアゴの巡礼路にあり、大規模な工業団地が予定されています。このプロジェクトが進むと、巡礼路やその周辺の価値に重大な影響を及ぼします。スペインイコモス国内委員会は、このプロジェクトにも反対しています。そして、巡礼路の関連団体はキャンペーンを展開し、地方の文化局と高等裁判所から仮命令を取り付けました。

それによって開発会社は、直接、この工業団地を開発しないと発表して、土地を売りに出してしまいました。これがどう決着するかは、今後を見ていかなければなりません。このほかガリシアのレンドンデラモスの新しい工業団地の計画もあります。このように巡礼道に沿って、残念な計画や決定が、さまざまな形で行われています。

最後に「文化の道」と「シリアル・ノミネーション」について少しお話しします。どちらも

国内のものと複数の国にまたがるものがありますが、いずれもさまざまな人々や文化相互の団結や平和という素晴らしい夢に向かって進歩を遂げる可能性を提供するものです。しかし、人類の文化的な遺産というのは、保存の専門家の力を合わせるだけでは、実現できないということを忘れてはなりません。

また、概念的な内容を拡大したり、世界の注目を浴びて敬意を集めるだけでも十分ではありません。誰もが知っているように、文化遺産の保存というのは、知識をどのように形成するかというところに依存しています。さらに何よりも大事なものは、社会的な認識や感受性です。社会的なニーズにも応えなければなりません。これは政治的な力や経済的な利害から切り離された、しっかりとした組織によって対応できるものです。それが大学や市民団体、そしてイコモスの役割だと思えます。



オーストラリア先住民アボリジナルの文化遺産



サンディー・ブレア（オーストラリア）
イコモス（ICOMOS）アジアパシフィック地区副会長補佐、オーストラリアイコモス国内委員会委員、遺産コンサルタント。専門は歴史学。オーストラリア国内及び世界的に文化遺産の保全・管理研究を行っている。

オーストラリアのほぼ中央に位置するウルル・カタ・ジュタ国立公園は、文化的景観の世界遺産であり、顕著で普遍的な価値を持っています。

オーストラリアの世界遺産は17ありますが、そのうち公園が2つあります。一つはカカドゥ国立公園、そしてもう一つがウルル・カタ・ジュタ国立公園です。これはアボリジナルの伝統や文化があるということで登録されています。

今日はオーストラリア北部のアーネム・ランドにおける平和や文化の交流の構築をご紹介します。と思います。

このアーネム・ランドには、アボリジナルのヨオルング族が所有している土地があります。彼らはオーストラリアでも最大の先住民グループの一つで、現在5000人くらいがこの地域に住んでいます。カカドゥと違って、ここは世界遺産ではありませんが、ヨオルングの人々にとって、世界遺産になることは優先すべきことではありません。彼らは重要な自然・文化的な価値を持っています。儀式や伝統的な土地管理の慣行も維持しています。

オーストラリア先住民の文化は、世界の文化的な伝統の中でも継続する生きてきた伝統文化として、

世界で最も古いものの一つと言われています。

一般的にオーストラリアの先住民は、内陸で孤立した存在と言われていますが、このヨオルング族はインドネシアのマカッサンと呼ばれる人々との交易があり、300年以上にわたる異文化との交流の歴史を持っています。2つの民族の交流は、食文化、交易言語、氏名、歌や宗教儀式等に関する関係の遺産があることから特定できます。

これはアジアや太平洋にも文化の道があったことを意味するものです。それはこの地域にとって重要なだけではなく、2つの民族の共通の遺産とも言えるべきものです。

何百年にもわたって続いた平和な交流を伝えていくためには、さまざまな方法があると思います。近い将来、オーストラリア政府が世界遺産にノミネートする可能性もあります。また、インドネシアとの共同プロジェクトが生まれるかもしれません。

現在、ヨオルング族は相互的学習センターを通して、自らの遺産・土地管理・コミュニティなどに関する経験を多くの人々と交流し、文化共有して理解し合おうとしています。

西アジアの世界遺産事情



高橋 隆志（日本）
岡田保良（日本）
イコモス本部執行委員。国士館大学イラク古代文化研究所教授。専門は都市史及び建築史、古代メソポタミア研究。イラク、イランなど主に西アジアをフィールドに調査・研究。

私の専門は西アジアまたはオリエントと言ってもいいのですが、古代文明や地域都市における建築史です。みなさんは西アジアという、ユーラシア大陸を東から西へ進むシルクロードの到達点と思われるかもしれません、この地域には古代文明の証をつなぐ重要な「文化の道」が少なからず存在するのです。

たとえば、旧約聖書に登場するヨルダンの「王の道」、あるいはアケメネス朝ペルシャの「帝王の道」。そういった歴史街道のほか、ここはイスラム教やキリスト教、そしてユダヤ教の聖地であることから、そうした宗教的な巡礼路も数多くあります。

そして、これらのルートに沿って、我々が注目する世界遺産の遺跡もたくさんあるわけです。かの有名なペトラ、ローマ時代からビザンチンにかけてのウンム・アル・ラッサース、そしてイスラム時代のカスラムムラ。ヨルダンでは、この3つの遺跡が世界遺産になっています。

イラクにも世界遺産が3つあります。ハトラ、アッシュール、サーマッラがそれですが、果たしてこの3つの遺跡を通じて、イラクが誇る古代メソポタミア文明が十分に伝えられているだろうか。私

は常々、疑問に思っています。

しかも、これらの3つの世界遺産のうち、アッシュールとサーマッラの2つは、現在、ユネスコの危機遺産リストに登録されています。

一方、イランではイスラムの都であるイスファハーン、それからアケメネス朝ペルシャの都ペルセポリス、そして紀元前1250年頃の都市遺跡チヨガ・ザンビル。現在、この3つが世界遺産に登録されています。

危機遺産リストに登録されている世界遺産は、文化遺産では16件ぐらいです。そのうち10件がこの地域に集中しているのは、やはり政治的・社会的に不安定な国が多いことを物語っています。また、大地震の被害も深刻です。

残念ながら、西アジアではイコモスの組織は、まだ十分に成長しきれていないのです。それでもイコモスのメンバーや国際協力による技術者グループは、この西アジアの国々の文化財の保存や修復事業に一生懸命努めています。

もしかしたら、その姿は将来の国際協力の姿を映し出しているのではないかと。将来に明るい見通しもあるのではないかと、そんなふうに思いながら、私はこれらの仕事に携わっています。

アラビア半島の「乳香の道」



エマ・アツシ（パレスチナ）

パレスチナイコモス国内委員会委員、イコモスCIRCメン
バー、ドバイ市の建設遺産課に勤務。シャルジャ大学建築工
学科助教授。専門は歴史的都市の修復、イスラエルと同様の
テーマでパレスチナサイドからの考察と提唱を行っている。

私は、アラビア半島における「乳香の道」について発表いたします。

古代のアラビア半島には、オマーン発の「乳香の道」がありました。この道は、かつて世界で最も珍重された香料「乳香」が運ばれた交易路でした。

アラビア半島南東部に多く自生するかんらん科の大木乳香の樹脂は、多くの文明で珍重された香料です。ローマ人は大変な対価を払って入手し、中国やインドネシアにも輸出されたと言われています。そして、この香料は宗教的な儀式で用いられたと言われていました。また、人々の生活を楽しむものとしても使われていました。

2000年になって、この道がオマーンで見つけられて、「乳香の道」という名前が付きましました。そして、これが部分的に文化遺産登録を果たしたわけです。

乳香は、エジプトのファラオの墓で発見されています。また、バビロニア人はこの乳香を最初に薬草として用いた民族です。シュメール人は強力な殺菌力があることに気づき、怪我や皮膚病を治すために使っていました。また、シバの女王がソロモン大王を訪問した際には、女王のキャラバン隊には大量の乳香が積まれたということです。

このオマーン発の「乳香の道」には、陸路と海路のルートがあったようです。そのうちの一つは、オマーンからアラビア湾を通過して、ゲラ、サウジアラビアを経て、イラクの方に向かうもの。もう一つはシャブワから出て、内陸でジャブリンに向かい、そして陸路のルートとつながるものなど、全部で6本のルートがあったようです。

これらのルートはシルクロードとつながったり、ヒジャール・アルハジルートに統合されたりと変遷がありました。陸のルートでは、もっぱらラクダが使われました。ラクダを馴らすことは非常に難しいのですが、このラクダを使った旅が続いたのです。そして、25マイルごとに設けられた宿場で、水や食料などを補充したわけです。宿場は一種の城塞的な役割も果たしました。また、非常に素晴らしいアーケードをめぐらしたのもありました。

乳香の取引は当時大きなものでしたが、時代とともに価値も薄れていきました。しかし、今でもこの地方ではまだ乳香の取引が行われており、現在と過去のイスラムの社会を共有化できる価値を生んでいると思っています。

世界の聖地・エルサレムの文化の道



ティポラ・ロン（イスラエル）

イスラエルイコモス国内委員会委員。NPOイスラエル暴力防止「寛容」協会会長。専門は歴史地理学。エルサレムヘブライ大学で歴史地理学の他ユダヤ人の歴史、都市地域を研究。現在、多くのエルサレムの保全、自然保護等の組織の役職を務める。

16世紀、エルサレムは3つの大陸（アジア、アフリカ、ヨーロッパ）の中心にありました。ここはユダヤ教とイスラム教、そしてキリスト教が遭遇する場所であり、また、遊牧民族と移住者、古代の慣習と近代化、イノベーションも遭遇する場所でもありました。

非常に狭い範囲なのですが、ここには豊かな緑があれば砂漠もある。遊牧民もいれば、古代からの民族もいて、みんなが接しているのです。

文化の道をどのようにプロモーションするかですが、まず地元住民と協力する。教育システム、教育関係者、意思決定者と協力する。また、来訪者に来てもらうには、特別の場所について、市民に対して知識を普及することです。

ここにはキリスト教、イスラム教とユダヤ教の「殉教の道」があります。イスラエルのオリトウームに向かう巡礼者の道で、エルサレムの旧市街には、今も巡礼者が集まっています。近くにはイスラム教のドルーズ派の巡礼の道もあります。

一方、イスラエルの南部に位置する「香の道」は、ソマリア、オマーン、イエメンなどで採取された乳香が、ローマ帝国まで運ばれた道です。1日に35キロしか進め

なかつたようですが、ガザの港からラクダに乗って行った道筋は今も残っています。「プリニーの道」は、紀元前3世紀から7世紀まで利用されていて、これも乳香を運んだ交易路です。

新しい道としては、「アブラハムの道」があります。この道は「香の道」につながっていて、ハランからメソポタミアへ向かうための道です。また、エルサレムには「イエスの道」もあります。これは最近、若い人たちが企画したものです。イエスの足跡を踏襲するというので、ナザレからガリレヤ海まで行く道です。新しい文化の道ですが、周辺の史跡はとも古く歴史のあるものばかりです。

最後はハイファにあるバハイワールドセンターです。2008年5月にユネスコの世界遺産リストに登録されましたが、世界中から来訪者が訪れる巡礼たちの聖地です。

このようにエルサレムには、歴史的価値のある「文化の道」がたくさんあるのです。

韓国とシルクロード



レナ・キム（韓国）

ホソノク大学教授、文化遺産委員会メンバー。1999年からイコモスのメンバーとなり、2005年から韓国イコモス国内委員会委員長を2年間務めた。

シルクロードは「絹の道」とも言われ、一般的にはユーラシア大陸の東西を結んだ陸上ルートを指します。しかし、これと並行して海路のルート、「海のシルクロード」も存在していたのです。

かつて韓国は、シルクロードと中国を経由して、西洋から運ばれてくる交易品を受け取る終着地点でした。外国との活発なコンタクトは、まさにシルクロードによって始まったのです。仏教、キャラバンの隊商による交易品など、さまざまな異文化がもたらされたわけです。

高句麗時代の装飾古墳や副葬品などは、こうした東西との交流という意味においても、非常に大きな価値があると思います。

この装飾古墳はラテルネンデック構造という造りになっています。これは西アジアを発祥の地とするもので、バーミヤンやキシル、敦煌の石窟などにも見られる造り方です。

また、古墳の内部の壁画は、仏教の影響を色濃く残しており、副葬品には黄金の置物やガラス製品など、明らかに西方の文化の影響を受けたものが数多く出土しています。

中国が仏教文化の絶頂期にあった頃には、多くの韓国人巡礼者が

インドを訪れて中国で学んでいます。特に7世紀から8世紀の中国・韓国・日本の仏教美術においては、いくつもの共通要素が見受けられ、シルクロードを通じて盛んに交易が行われたことを物語っています。それは日本の正倉院の美術品や記録からもうかがうことができます。

一方、中国の唐三彩・青磁・白磁などの陶磁器は、遠くアラブまで海上ルートによって交易されました。また、気候も良く、金も豊富、そして水も良い新羅には、船でやってきたアラブ人たちが、そのまま居着いてしまったことも記録に残っています。

近年、韓国の沿岸部で陶磁器の破片が発見され、さらに14世紀の初期と思われる陶器を積んだ難破船が、朝鮮半島の西側の新安（シナン）沖で発見されました。その中でも特に興味深いのは、発見された陶器の箱の木片に「東福寺」という文字があり、日本のお寺に運ばれたことが記されていたことです。

これらのことから、韓国と日本はシルクロードの終着地点であったということが間違いないと考えられています。

朝鮮通信使は日韓共通の遺産



三宅理一（日本）

日本イコモス国内委員会委員。パリ国立工芸院教授。建築史、遺産学、地域計画、デザイン理論を専攻。世界各地で遺産保護、都市計画、デザイン振興事業を担当。東京大学工学部建築学科、パリ・エコール・ポザール卒業。工学博士。慶應義塾大学教授などを歴任。

朝鮮通信使は、日本の江戸時代に派遣されています。韓国では朝鮮王朝の時代です。

徳川時代の前、日本と韓国の間では戦争がありました。そこで終戦処理をして、外交関係を再開するために、1607年、朝鮮国王は最初の通信使を日本に送っています。その後、通信使は19世紀の初頭までに、12回にわたって送られています。通信使は、新しい将軍が誕生する時に送られました。

通信使は、ソウルから江戸までの行程を、釜山を経由して海を渡って大阪まで来ました。そこから陸路で、京都、名古屋、静岡、小田原、そして江戸に到着しました。一行は朝鮮から500人、対馬藩から500人、地元藩から500人の総勢1500人でした。

彼らが日本に到着すると、各藩の藩主が歓迎して出迎え、行く先々での応対も各藩の受け持ち。そして藩から藩へと、まるでリレーのようにして、江戸の將軍のところまで行つたわけです。

こうした記録はさまざまな文書によって、日本でも韓国でも保存されていることがわかっています。また、各地の遺跡や建物などからも当時の様子が伺え

ます。鞆の浦（広島県福山市）にある福禪寺対潮楼もその一つです。古い旅館の宿表を見ると、彼らがどのような施設に分散して、宿泊したかということもわかります。

一方、韓国の港町、釜山の近くには、大規模な日本人社会がありました。そこには対馬藩の武士や労働者たちが住み、日韓のパイプ役を務めていたのです。私も最近になって気がついたので、彼らが住んでいた建物は、まさに両国の文化を取り入れた2つの文化の融合です。畳の部屋や床の間はあるけれども、全体的な間取りは左右対称で、建物の外観は朝鮮の迎賓館の形式でした。

朝鮮通信使の道は、まさに国王の道（カミノ・レアル）です。世界が融合の時代を迎えようとする今、私たちは地元の共同体やNPOとの共同作業によって、朝鮮通信使の歴史的な記念物を日韓共通の遺産にしようと考えています。

こういう時代だからこそ、日韓共通の遺産は、2つの文化の相互理解のためにも、非常に重要であると思っています。

朝鮮王朝使節団の日本への文化の道



クワングシク・キム(韓国)

韓国イコモス国内委員会委員。元高麗大学校教授。ソウル大学・ロンドン大学卒業。1962年から1994年の間、韓国文化省に勤務し、文化省の外交官として東京・ニューヨーク・ロンドン・香港に駐在。

朝鮮王朝の使節団に関する研究は、ここ30〜40年の間に、日本と韓国で行われており、かなり学術的な証拠が収集されています。その辺については、三宅先生は専門でいらっしゃるし、現地調査なども随分とされていますので、私からは補完的な情報を提供したいと思います。

秀吉による朝鮮への侵略に対して、批判的な見方をしていた家康は、天下を取った後、朝鮮との和解の姿勢を取り始め、朝鮮王朝に公式の使節団を送ってほしいと要請しました。その結果、1607年に最初の使節団が日本に派遣されました。その後、約200年に渡って12使節団が派遣されています。

この朝鮮使節団は、釜山から対馬列島に向かって旅したわけです。釜山の港から対馬は、たった50キロしか離れておりません。また、三宅先生のお話にもありました。当時、釜山には日本人の居住地があり、そこしか交易権を持っていなかったのです。しかも、それは対馬藩だけに許されていたわけですね。

従って、使節団の日本への送迎なども、すべて対馬藩に任せられたわけですね。こうして日本に使節団が派遣されたわけですが、その後、明治になって大名制度がなくなる

と、この使節団の派遣も自然と消滅してしまいました。

しかし、今も対馬には、当時の様子を伝えるたくさんさんの資料が残っています。また、韓国にもさまざまな手記や記録が残っています。その中でも『海行摺載』という本は、当時の外交官が日本についてまとめたもので、実に6000ページにも及んでいます。

当時は小さな漁村だった釜山は、この朝鮮王朝使節団、植民地時代、朝鮮戦争を経て、今や世界の貿易のハブ港へと発展しています。2004年には釜山市に文化交流協会が設立されました。また、1965年の日韓の和解後、両国の市民のネットワークが形成されるなど、通信使に関する研究、交流なども盛んに行われるようになってきました。

文化の道は、さまざまな人間と文化のコンタクトを推進し、そして人々と文化を接触させるものです。そういった中で、通信使が両国に残した記憶は顕著な価値を有すると思います。この道を包括的に学習し、研究することによって、世界平和の構築に寄与していきたいと考えます。

文化の道から考える平和と異文化交流



ビクター・フェルナンデス・サリナ(スペイン)

イコモスCI-Cメンバー。セビリア大学都市地理学・遺産学教授。地理学博士。主な専門テーマは、歴史都市、遺産と都市と領土の関係、文化の道、文化的景観。アンダルシアの景観地区における文化遺産の特質について現在総合コーディネーターとして研究に関わっている。

「文化の道」は長い時間をかけて、歴史の中で形成されてきたものです。しかも、その道は豊かな軌道を通っているのです。地理的なアイデンティティも必要です。また、そのレイアウトは、観光や都市計画のために変えてはなりません。そういう意味では、遺跡や記念物と同じです。道が景観をつくるのであって、その逆はないのです。また、道の景観を保護すること、道そのものが保護されるわけでもありません。

近年、「文化の道」を特定する方法には、さまざまな進歩が見られました。2008年10月のケベックでのイコモス総会で、「文化の道の憲章」が承認されて、このような文化財をどう研究・分析していくかについては、ある程度成熟したと思います。しかし、それをどのように保護し、管理・活用していくかについては、まだ多くのことが決められていません。そういう意味においても、次の点を考慮しなければならぬと思います。

まず、道はそれぞれが特異的なものですから、ある道と別の道とは同じような管理をすることはできません。

また、道の管理には、さまざまな種類の行政に関わる広範な管理計画が必要です。

「文化の道」の保護については、公共政策の中に横断的に組み込まなければならないかもしれません。たとえば、都市計画、文化財、地域組織など、その道にインパクトを与える活動のすべてをカバーしなければなりません。

文化の道は文化的景観の産物といえます。しかし、その逆は正しいのです。今後は次の点を考えなければなりません。まず、既存の道と景観との間の保護メカニズムを確立すること。そして、道の拡張を考える際は、機械的、直線的なものとは考えないこと。

いずれにしても、「文化の道」に関する仕事は、大変興味深いものです。と言うのは、現在の世界遺産の理論は、これを中心に進化しているからです。しかし、保護や管理という面においては、まだ初歩的な段階にあります。

従って、管理モデルを実施するにあたっては、これらの道の文化的な価値を維持することを重視するとともに、現在の完全性や真正性に関する問題にも、的確に対応できるように管理計画が必要だと考えます。

地中海から世界に続く「サンゴの道」



ローザ・アンナ・ジェノベーゼ（イタリア）
イタリアイコモス国内委員会委員。修復学教授。専門は建築遺跡の修復。イタリア国内において多数の建築物修復を指導・管理。1977年よりイコモスのメンバーとして活動。C.I.C.C.のメンバーであり、理論委員会のエキスパートメンバーでもある。

「文化の道」というのは、ある特定の歴史的な現象を表しています。これは人間の進化・発展を基にしており、この遺産の豊かさや多様性などを説明しています。そして、普遍的な文化づくりということにも貢献しています。また、現実的な歴史の解釈ということも可能になるし、さまざまなコミュニケーションや国家間の協力関係というものも、この道に沿って読み取ることができます。

「文化の道」は、有形・無形の価値に関する例外的な遺産で、我々の住むこの地球の歴史とも重なっています。ですから、グローバルな視点で保存しなければなりません。

最も有名な商業的なルートで、地中海とアジアを結ぶものと言え、私たちはまず「シルクロード」を思い浮かべます。そして、「香料の道」であります。そして、これらに合わせて「サンゴの道」も考えられると思います。こういった道は、絶え間ない交流、コネクション、文化の類似性、関係などによって作られてきました。

サンゴの道は、地中海で採取されたサンゴが、インド、ウズベキスタン、イエメン、モロッコといった国々との交易によって築かれたとも言えます。

現存する古文書によると、地中海のサンゴは紀元前5〜4世紀に、インドに急速に広まったことが読んで取れます。インドでは男性が好んで付けたこともわかっています。また、モンゴルでは単なる装飾品ではなく、それをまとう人の社会的・政治的な地位をも示唆するものになりました。

そして、大洋を渡ってアメリカの先住民のところにまで達しています。さらにニューメキシコまで道は広がっていきます。

このきつかけとなったのが、スペインからの征服者であります。つまり、スペインの文化にはサンゴがあったわけです。

これらのことから推測できることは、サンゴがさまざまな利用方法、習慣、信仰などに従って、シンボリックな意味合いを持つに至った文化の枠組みは、一つではないということですね。

サンゴにつながる文化とは、真正な地中海の宝物として、何世紀にも渡り、多くの国で育まれてきました。

世界文化遺産の危機管理と平和



益田兼房（日本）
日本イコモス国内委員会理事。立命館大学歴史都市防災研究センター教授。横浜国立大学工学部建築学科卒業。工学博士。京都府教育委員会文化財保護課技術員。文化庁文化財保護部建物課調査員。東京芸術大学大学院文化財保存学専攻教授を経て、2004年から現職。

ご承知の通り、伊勢神宮は20年ごとに建て替えられます。文化遺産のオーセンティシティという観点から言えば、マテリアルのそれは100%ないわけですが、デザインのオーセンティシティは、このシステムが始まりました8世紀から続いているわけです。また、これを建て替えるクラフトマンシップのそれも恐らく100%保たれています。

では、世界遺産の法隆寺の五重塔は、どのようにして、現在まで伝えられてきたのでしょうか。これは解体修理をするために、1950年代に作られた足場の写真ですが、このように一つ一つ部材をばらしながら、傷んだところを修理して組み直しています。

同じく世界遺産の法起寺の三重塔の場合だと、8世紀の初期に建てられた部材が、現在も7割方から8割方も残っています。場所によっては全部残っているんです。それを可能にしてきたのが、宮大工という無形の文化遺産です。この技術が日本の重要な文化を守ってきたのです。

木造の文化遺産にとって、一番怖いのは火事です。仁和寺や白川郷などの世界遺産では、それぞれ防災対策を行っています。問題は地域全体が燃え始めた

時にどうするかです。日本は地震列島ですから、地震に対する不安も大きいのです。

これは1995年の阪神大震災の時の写真です。日本は常に人類共通の遺産を守るために、このような防災に対応したシステムを備えていることが要求されているわけです。

世界ではどうかと言いますと、地震帯と文化遺産の分布は、かなり重なっているんです。イタリアやギリシャなど、世界遺産の多い南ヨーロッパでは地震が多いのに、西ヨーロッパではほとんど地震は起きていない。また、中南米や東アジア、西アジアでも、大きな地震がたびたび起こっています。

2005年に神戸で開催された国連防災世界会議では、文化遺産も課題となり、防災時における危機管理を世界に呼びかけました。

リスクの高い世界遺産を守るためには、まず、危機管理計画を立てる必要があります。この危機管理計画を進めるにあたって、イコモスのICORPは、非常に大きな責任を負っています。

第2セッション 世界平和の構築に寄与する世界遺産の特質

新しく求められる世界遺産の意義と価値



杉尾邦江(日本)

イコモス(CIIC)日本代表、日本イコモス国内委員会理事。
㈱フレック研究所代表取締役副社長。農学博士。環境、文化
関係のコンサルタントとして日本の世界文化遺産・自然遺産
の多くの登録申請業務、保存、保護業務に携わってきた。

新しく求められる世界遺産の意義に対する新しい視点として、私は大きく分けて「遺産のグローバル化」と「人類の生存」の二つがあると思います。

この二つは全く結びつかないようには見えませんが、文化遺産というのは人類の営みの中で形成され、人類が保全・保存・育成をしながら、次の世代へと継承していくものです。文化は人間が創出し、人類が保全・継承していくものです。

今、人類の生存の危機が大きな問題になっています。その背景には地球レベルの環境汚染がありま

す。このままの状態が進めば、世界遺産・文化遺産を保全・育成する人類も滅亡してしまいます。

一方、地球レベルでの環境保全をどうしていくか。それも大きな課題になっています。私はこれらの世界遺産の意義を問うには、やはりこの二つの視点を見逃してはならないと思います。

では、なぜ、グローバル化の概念や価値基準を当てはめて、新たに遺産登録しようとしても、その質的な基準を満たすことが困難になつてきた。そこで新しい概念として、カルチュラルルート、シリアルノミネーション、文化的景観といった遺産の重要性が認識され

てきたわけです。

また、遺産登録の不均衡を是正するために、今までの概念や基準を当てはめて、登録の不均衡を是正しようとしても、それができない状態にあるわけです。ですから新しい概念の創出がどうしても必要なのです。

つまり、世界遺産を取り巻く環境は、一方では遺産を新しく創出しようとしているのに、一方では危機遺産というものが増えているわけです。それらの起因となっているものは、やはり戦争や民族間の抗争などがあげられます。

たとえば、シルクロードには多くの紛争地帯が横たわっています。それが続く限りカルチュラルルートとしては分断され不完全なルートとして部分的な資産を分散させる、シリアルノミネーションという形では、登録の可能性はありません。紛争地帯を含めて世界遺産(カルチュラルルート)として登録することはできないわけです。

いずれにしても、世界の平和の構築に向けて、全人類が真剣に取り組まなければなりません。「地球規模の環境保全」と「世界平和の構築」という2つの視点から世界遺産を考えていくことが、私はこれからますます重要になっていくと思っております。

世界平和に寄与する世界遺産の新しい概念



ドツソ・シンドウ(コートジボワール)

イコモス本部諮問委員会副委員長。1988年から文化省に勤務。
文化遺産の保護行政のほか、イコモスではコートジボワールイコモスの委員長。また、最近ではイコモス(CIIC)アフリカ地区の副委員長として、カルチュラルルートの研究、プロモーションに尽力している。

3つの文化の道を事例にあげて、「世界平和の構築に寄与する世界遺産と可能性の新しい概念」についてお話ししたいと思います。

まず1つ目は「奴隷の道」です。この地図は、アフリカ諸国から沿岸部まで、奴隷たちが連れて行かれた内陸の道を示したものです。ここから彼らは水平線の彼方へ送られていったわけです。その象徴として、セネガルのゴレ島が人類最大の負の遺産として世界遺産に登録されました。ここには「奴隷の家」が残されており、毎年、多くのアフリカ系アメリカ人が訪れています。

2つ目は「絹の道」です。これは最も実り多き文化の道の一つで、世界の5大陸が結ばれていました。絹という素晴らしい産業素材を媒介にして、世界中をつないでいった道です。その中心となった中央アジアでは、今も絹の伝統文化が息づいています。

3つ目は「宗教の道」です。いろいろなルートが世界中にあります。が、実質的な文化の道というのは数少ないです。ただ近代化以前の時代に遡ると、バチカンあるいはメッカへ巡礼するルートが、本当の意味での文化の道と言えるでしょう。

このように文化の道は、古代の人、現在の人、消えつつある文明、

現存する文明の証拠として、大きな役割を果たしてきたわけです。

もし、文化の道が現代のさまざまな課題に対して、社会的理想に寄与しないのであれば、何の意味があるのでしょうか。やはり人類の便益に寄与するためには、特定の原則に基づいて管理しなくてはなりません。

そういう意味においても保存は重要ですが、そして、インタープリテーション(解釈)は、歴史の事実に基づくものでなければなりません。コミュニケーションは、学生、研究者などに知ってもらうために重要です。また、エンハンズメント(促進)については、応用研究を奨励して、それぞれの道に関する資料の文書化などを進めていきます。

文化の道は世界遺産の新たな分類を構成します。人間の多文化間の関係から生まれた進化的、相互作用的でダイナミックなプロセスの成果です。その特徴は、真の意味でのコミュニケーションが存在することです。単に保存すべき遺産というだけでなく、道を通じて人々、国、世代を越えた連帯感が生まれ、人間の価値観の統一性が認識できます。文化の道は、人間相互の尊敬と持続可能な平和をもたらすものです。

平和のための世界遺産をあらためて考える



稲葉信子(日本)

イコモス国際トレーニング委員会委員、筑波大学大学院人間総合科学
研究科教授、工学博士。専門は文化遺産の保存及び建築史、遺産の概念、
保護の理念から政策に至るまで、幅広く各国や国際機関の動向につい
て比較研究を行っている。日本ユネスコ国内委員会の委員でもある。

私は、世界遺産の仕事を長くやって
いますが、実は「平和」という言葉が
キーワードにして仕事をしたことは
ありません。今回のシンポジウムで初
めて「平和」というキーワードを与
えられて、私たちは今まで何をしてき
たのか。これから何をすべきかと、改
めて考え始めるところです。

国連のキャンペーンの中に「平和
の文化」があります。ここでは平
和の文化を次のように定義してい
ます。「対話と交渉を通じた価値観
態度、行動の伝統や様式、あるいは
生き方」と。

この国連のキャンペーンに関係し
てユネスコでは、「平和の文化のた
めの遺産キャンペーン」というもの
も展開しています。これは世界のN
GOをつないでローカルな遺産を
守っていくことで、地域のコミュニ
ティの発展と平和につなげていこう
とするプロジェクトです。ユネス
コでこれを扱っている部局は世界遺
産センターとは異なりますが、実は
これも世界遺産と大きく関係してい
る、あるいは大いに関係すべきもの
ではないかと思っています。

もともと道というのは、1992
年にその概念がオペレーションナル・
ガイドライン(世界遺産条約履行の
ための作業指針)に取り込まれた頃
は、「文化的景観」の一部として定
義されていました。これが独立して、

現在では「遺産の道」についての特
別な定義が設けられるようになって
います。そして独立したときからそ
こには「平和の文化」という言葉が
入っています。

この遺産の道と平和の文化の関係
について、オペレーションナル・ガ
イドラインは、「遺産の道の概念は、
相互理解、歴史への多元的アプロ
チ、平和の文化のすべてが機能する
優れた枠組を提供する、豊かな実り
あるものであることを示している」
と書いています。

世界遺産条約が採択されて、20
12年で40周年を迎えます。それに
向けて世界遺産委員会でも、さまざ
まな協議を重ねています。遺産の価
値をどう考えるか。グローバル・ス
トラテジーの次の段階をどう考える
のか。世界遺産条件のシステムはど
うあるべきか。その中で、平和をど
う捉えていくかだと思っています。

お見せしている写真は、トーゴ共
和国にあるクータマクという、こ
の地域の人々の集落がそのまま世界
遺産となっているところです。これ
からようやく近代化そして開発が始
まろうとしています。地元の人か、
世界遺産になって良かったと思うか
どうかは、これから答えが出てくる
と思います。その結果が、世界遺産
が平和に貢献できる試金石になる
と、私はそう固く信じています。

南東ヨーロッパにおける文化の道と平和



トドール・クレステフ(ブルガリア)

イコモス及びブルガリアイコモス名誉委員、ソフィア大学教授、イコモス
CICCの設立メンバーであり、ユネスコ、イコモスでの世界文化遺産の
評価のエキスパートとして活躍、多数の文化遺産分野の著書・論文がある。
イコモスCICCでは、文化の道の理論構築に大きな功績を残している。

ヨーロッパの南東部は、何世紀
にもわたって文明や民族、そして
宗教の交差路でありました。この
地域は特別な文化の一体感があり
ます。相互関係や相互への影響、
また共通の文化的な現象も見られ
ます。たとえば、古代ローマの遺
産、キリスト教の修道院、土地独
特の建築物、イスラム文化、無形
遺産などです。

その結果、2000年、この地
域では南東ヨーロッパの文化の道
の地域ネットワークが形成されま
した。

こうした中で、2003年、イ
コモスのリクエストによって、バ
ルカンの正教会修道院の研究が本
格的にスタートしました。ブルガ
リア、ギリシア、ルーマニアの3
カ国は、修道院の文化的価値を共
有するだけでなく、巡礼路を文化
の道のネットワークに統合するこ
とをめざしたのです。そして世界
遺産リストへの登録をめざすとと
もに、文化観光という新しいビ
ジョンも打ち出したのです。

その中からブルガリアの3つの
道をご紹介します。

まず、イヴァノヴォ・チェル
ベンという文化の道です。これ
は中世の巡礼路で、世界遺産の
イヴァノヴォの修道院に向かう
道です。

それから中世の要塞であるチェ
ルベンです。この要塞は文化的な
観光のために持続可能な形で利用
し、また保存するための対策がこ
れまでに提案されています。

ロドピーの聖なる山の文化の道
は、バシヨコボの道という中世の
巡礼路に続いています。4つの修
道院、30の教会、2000のチャ
ペルを結んでいて、バルカンの正
教会が集積しています。この文化
の道は、フィリップポリスという、
古代ローマのトラキア州の州都に
つながっています。日本とブルガ
リアのイコモスが協力して、古
代の文化的記念物を修復していま
す。

私たちは、南東ヨーロッパの文
化の道を考える際に、さまざまな
レベルの文化遺産のマクロ構造の
枠組の中で、オープンなシステム
として考えなければなりません。
世界のレベル、ヨーロッパのレ
ベル、南東ヨーロッパ、そして地
域のレベルです。例えば、シルク
ロードはそれぞれのレベルで通り
ます。

この文化の道のネットワークを
通して、新しい価値観を共有する
ことができます。

次世代の世界遺産の新しい概念



フランシスコ・ロペス・モラレス（メキシコ）

イコモス副会長、ユネスコ世界遺産委員会専門委員会メンバー。1991年からイコモス本部執行委員会メンバー。専門は都市学。メキシコ建築の権威で多くの著作がある。メキシコ国立ポリテクニック大学の建築・マスタークラスの教授。2001年メキシコ市にある国立歴史遺産・文化人類学研究所の局長となる。

アメリカ合衆国とメキシコは「カミノ・レアル・デ・ティエラ・アデントロ」という文化の道を共有しています。全長約2900キロメートルのうち、約2000キロがメキシコ領土内。その出発点はメキシコシティで、終着点はアメリカのサンタフェです。

この道の世界遺産登録をめざして、1993年、アメリカとメキシコは共同プロジェクトを結成しました。私は当初からメキシコチームの一員として、このプロジェクトに参加しています。

世界遺産リストへの登録をめざして、文化の道の保護・保全を促進するためには、地域の人々の意識の高揚と参画が必要です。さまざまなリスクを避けるために、法的手段なども確立しなくてはなりません。また、文化の道の沿道の文化遺産を特定、保護、保全、改善して、人々に伝えていくということも、プロジェクトの重要なミッションです。

文化の道については、国際的なイベントにも力を入れています。2008年7月には、スペインのブルゴスでも会議を開催しています。もちろん、メキシコにおいてもセミナーなどを開催しています。

こうしたプロジェクトでの仕事

を通じて、私たちは非常に重要な遺産を特定することができました。その一つは18世紀の古い橋で、デュランゴにある「レビルの橋」です。

また、歴史的な道路もありません。デュランゴは、かつては銀の鉱山の町として栄えました。しかし、17世紀の後半になると、銀の交易は衰退し、さまざまな都市につながっていた道のネットワークは、新しい区画をもたらししました。

これは2年前の新しい発見ですが、マリア・ローザさんにある硬貨を差し上げました。ヨーロッパの文化と北アメリカの先住民の文化の接点で見つけました。その周辺の多くの洞窟に壁画が描かれており、スペイン風の馬車の壁画があるのです。この文化の道は、2001年に国内暫定リストに加えられました。

これらは私たちが数年前からやっていることのほんの一部です。私たちは新しい登録推薦資料の提出のため、各州をはじめ、それらを統括する調整作業部会を立ち上げ、対応しています。

バーミヤンの世界遺産と平和



前田耕作（日本）

日本イコモス国内委員会監事。アフガニスタン文化研究所所長。和光大学名誉教授。ユネスコ・アフガニスタン文化遺産保護国際調整委員。日本・アフガニスタン協会の理事など。名古屋大学文学部卒業。専攻はアジア文化史。アフガニスタンの文化復興と文化財の保存・修復の問題に取り組んでいる。

私はアフガニスタンのバーミヤンで、現在、遺跡の保存と修復の事業に携わっています。

皆さんもご存知のように、世界遺産のバーミヤンの大仏は、2001年3月、タリバンによって爆破されてしまいました。この大仏の前を東西に走る道があります。この道は古くからの交易の道であると同時に、異文化との盛んな交流の道でもありました。西方のギリシア、ローマ、ペルシアの文化、東方の中国の文化、南方のインドの文化、そして中央アジア諸国の文化が、この道を通じてヒンドゥークシュ山脈の山中にあるバーミヤンに流れ込み、世界に誇る見事な文化へと結晶させたのです。

絵画や造形は仏教的なモチーフを扱っていますが、画法や様式は極めて国際的なものです。互いの宗教や国の違いを超えて、最高の技術と力量で協働しなかったならば、あのような芸術的創造はできなかつたに違いありません。そして何よりも大事業を成功に導いたのは、その時代の根底に持続する平和があったからです。

バーミヤンの西大仏は高さ55メートル。下から見上げた大仏の天井には、見事な壁画が描かれていましたが、タリバンによって、

大仏の体は崩し落とされ、壁画もすべて破壊されてしまいました。東大仏も同じ運命に遭いましたが、私たち調査団は、これらをも一つ残すことなく回収しました。

私たちは今年の夏にも、バーミヤンに行きましたが、そこで「若葉の発芽」を発見しました。20歳前後の若者たちの活動グループで、バーミヤンの文化を知るために、自分たちの手で大仏の前に文化センターをつくったのです。イスラム教徒でもある彼らにとつて、それはまさに異教徒の歴史を知ることです。

若い曇りのない目で、異質ながらも重なりあう豊かな文化を見つけていけば、文化の本質は、個の多様性にあるということを学びとることでしよう。

平和構築の第一歩は、まさにこの認識から始まると思います。アフガニスタンの人々は、戦火の直後、廃墟の中で自ら発した言葉を今も守り続けています。

「文化が生き残っていれば、国もまた必ず生き延びるだろう」多くの国を結ぶシルクロードの世界遺産登録が実現すれば、世界平和へ至る道のもう一つの扉を確実に開くものと信じています。

総括セッション

これからの世界遺産の 意義を問う。

宗田先生と5人の皆さんに語っていただきました。

文化の道は町や地域をつなげるだけでなく、社会全体が発展していくための資源だと思う。

宗田 本日のシンポジウムの総括というところで、5人の先生とご一緒に進めていきたいと思っています。まず、今日のテーマである「これからの世界遺産の意義を問う」について言えば、現在の世界遺産の多くは持続的な平和の中で、人々が交流した結果によって生まれたものです。つまり、創造の賜物なんです。

でも、じゃあ世界遺産が平和を構築する力になるかというと、これは大変難しい課題です。これについては、アバロス先生からお話しただけませんか。

アバロス 記念物や遺跡には、歴史の過程が重要です。文化の道も然りです。世界的に知られる文化の道は、歴史の中で大きな役割を果たしてきました。また、それぞれが独自の価値というものを持っています。

こうした遺産にとって必要なことは評価・保護・保存の措置です。

また、コミュニケーションとトレーニングの措置も必要です。さらにはその過程を管理することも必要です。そして、これらを戦略的に進めるにあたっては、法的な整備、つまり規制上の整備が必要なのです。そのもとで遺産を保全し、その価値を全体的な形で見せていかなければなりません。

宗田 今日の基調講演でマリア・ローザ先生が、スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」でも、ダムや高速道路の建設による破壊が懸念されているとおっしゃっていました。

実は、三重県でも紀勢自動車道が建設中で、その影響を懸念している専門家もいます。そういう開発に関する問題に対しても、文化の道の問題というものを理解し、どう守っていくのか、大変重要な課題だと思えますが、サリナ先生はどのようにお考えですか。

サリナ 私は、平和がなければ文

化の道も存在しないし、文化遺産も存在しないと考えています。文化の道は、町や地域をつなげるだけでなく、人や技術の交流につながります。交易の場となり、文化

の橋渡しをしますが、最終的に誰のものなのかというと、誰のものでもないわけです。すべては社会が発展するための資源なのです。では、その遺産は誰による遺産なのかというと、私たち人間による遺産なのです。平和は人間が創造しうる最も重要な遺産だと思います。ですから、私たち人類の共通の遺産として、政治のレベルまで伝えていかなければいけません。

宗田 私たちの力で、どうやって政治家に平和を伝えていくか。今日のシンポジウムでも、いろいろな議論がありましたが、その中で驚くべきことは、パレスチナのプレゼンテーションの後に、イスラエルのプレゼンテーションがあった

ことです。また、奴隷ルートのお話は、実は私も今日初めて知りました。私たちイコモスの活動の一端として、文化の道を通じて平和を考えていく。そういう機会を増やしていくことも、今後は大切ではないかと思いますが、それに就いてコンティ先生はどう思われますか。

コンティ 今日のいくつかの発表でわかったことは、いかに文化の道が人類に大きな影響を与えてきたかということです。また、新しい課題に対する発表もいくつかありました。サンティアゴ巡礼路の例でも示されたように、開発の問題もありました。それから持続可能な観光の話も出ました。

そして、これらを解決するための新しいアイデア、新しいビジョンも出ました。また、さまざまな技術的な研究やツールの戦略という話も出ました。

しかし、こうした学問的な考え方と、実際の保全や管理に携わる人々の間には、多少のギャップがあるのではないかとことも強く感じました。ですから、まずは





コーディネータ・宗田好史

(日本)
イコモス文化観光国際学術委員会日本代表、日本イコモス国内委員会委員。京都府立大学人間環境部環境デザイン学科准教授。工学博士。

アンジェラ・ロハス・アパロス

(キューバ)
イコモス本部執行委員。元キューバイコモス国内委員会委員長、イコモス国際学術委員会委員。ハバナ大学建築学部教授。都市計画の専門家。



ビクター・フェルナンデス・サリナ

(スペイン)
イコモス CIIC メンバー。セビリア大学都市地理学・遺産学教授。地理学博士。主な専門テーマは、歴史都市、遺産と都市と領地の関係、文化の道、文化的景観。



アルフレッド・コンティ

(アルゼンチン)
イコモス本部執行委員。アルゼンチンイコモス国内委員会委員長。前イコモス副会長。ラプラタ大学教授。歴史的遺産の国家委員会アドバイザー。



岡田保良

(日本)
イコモス本部執行委員。国士舘大学イラク古代文化研究所教授。専門は都市史及び建築史、古代メソポタミア研究。



三宅理一

(日本)
日本イコモス国内委員会委員。パリ国立工芸院教授。建築史、遺産学、地域計画、デザイン理論を専攻。世界各地で遺産保護、都市計画、デザイン振興事業を担当。



このギャップを埋めなきゃいけないと思います。

そして、最後に世界遺産がどう世界で貢献できるかということ、いくつかのアイデアが出されましたが、そこで私が着目したのは、世界遺産は重要であるけれど、それだけでは十分ではないということ。

つまり、多様性が文化のエッセンスになるわけです。その意味の理解を深めれば、世界遺産は世界平和のために、必ず貢献できるの

ではないでしょうか。宗田 私も世界遺産の役割は、もっと進化していかねばならないと思っています。我々のような専門家も、従来のような王侯貴族の残した遺物を守るといふ役割ではなく、人類がつくったものを人類のために受け継いでいく。またはそれを守っていくことで互いの理解を深め合いながら、そのギャップを埋めていく取組が必要ではないかと思

国、民族間で共通の文化遺産を見出すプロセスが平和をもたらす。

岡田 今、コンティ先生が「文化の本質はその多様性だ」というようなことをおっしゃいましたよね。その多様な文化というものを

理解する、そのためのベースとなるのが、私は文化の道じゃないかと思っています。今日はいろんな方が、シルク

ロードの方から来日されました。私の専門とする西アジアのフィールドにも、シルクロードは到達しているわけです。そのシルクロードとサントティアゴ・デ・コンポステーラを比較して、少しお話ししてもよろしいでしょうか。

宗田 ぜひ、よろしくお願いします。

岡田 シルクロードは何を結びつけているのだろうか。これは大きな疑問になっていくと思います。サントティアゴの場合は、「キリスト教の巡礼」という明確なコンセプトを持っていて、それに沿ったいろいろな文化遺産があるわけですが、もしかしたらシルクロードの場合は、中国の文化と中央アジアの先史の遺跡とが道でつながっているというように、そういうコンセプトになるかもしれません。それをイコモスや世界遺産条約が果たして受け入れるかどうか。

そういう議論にまで発展していくと思います。つまり、時代もコンセプトも違うようなものが、単に道で結ばれているだけで「文化の道」と言えるのかどうか。その議論はきつと出てくると思います。

しかし、私はそういう国境や民族や言葉の壁を乗り越え、お互いが合意を求めて結論を得ようとするそのプロセスこそが、平和そのものじゃないかと思うんです。

宗田 三宅先生はどういうお考えをお持ちですか。

三宅 まず文化の道について。大別すると2つの形があります。1つは貿易、外交で成立するあり方。もう1つは広域でネットワークを形成するあり方。エジプトのゴンドールで、日本の石見銀山(島根県)、リスボン(ポルトガル)の3つの都市が、銀の流通をテーマに国際会議を開きました。こういうポルトガル人の交易による都市

間交流というのは、非常にわかりやすいと思います。

宗田 そうですね。交易することにつながりますからね。

三宅 ええ。次に保存技術の移転について。実はずっと東方正教会の修道院の修復をやっていますね。ルーマニアでは世界遺産を担当しています。それからロシア、エジプト、エチオピアと、いろんな国で修道院を修復しています。しかし、国によっては保存態勢が整っていない。ならば学校を作ろうと、エジプトでは国際協力で修復の学校を作りました。ルーマニア人がエジプト人にフレスコ修復を教えています。このような戦略的な組立があつてしかるべきだろうと思います。

宗田 私は、若い頃から三宅先生を存じあげているんですが、本当に世界のいろんな国を歩かれていますよね。

三宅 ずっと現場をやってきましたからね。現場というのはコンフリクト(衝突)の固まりなんです。平和を考えることは大変難しいことです。私の場合はコンフリクトがなくなるようにするために、どうすればいいのかと考えるわけです。

そのためには根気が第一ですが、それをどうやって開発するかということを示さないとね。アフリカでは目の前で紛争が起きたりしているけど、「一緒に直しましょう。修復をしましょう。昔の文化を再興しましょう」と、そういうプロセスから始めていく。とつても地道なんですけど、そういうことをやる人間が必要でね。まずは人材を育成していくことが、先決かなと思っています。

宗田 国境を越えて文化遺産を修復する活動が、どんどん新しい交流を生んでいく。平和につながっていく。また、そのことによって、地域の人々の社会も安定するし、そこから経済の発展につながるかもしれないからね。

今、この三重県には熊野古道があって、これを守る会の人々が一生懸命やっておられます。そういう姿に若い方たちが触発されて保存修復の活動に参加される。そして、そういう人たちのなかから、アフリカに飛ぶような若い人が出てくると素晴らしいですよ。

計画されているのですが、まだ実践には至っていないんですね。あの小さな村での事例はあるのですが、自治体の政権交代があつて、新政権ではそのプロジェクトの継続はなくなつてしまいました。

アバロス キューバでは大変興味深いものがあります。全国的な試みのテレビ番組ですが、毎週、世界遺産のあるハバナの周りを歩くというもので、若い人も子どももこの番組をよく観ています。私は、テレビを使うのはいい方法だと思いますね。

宗田 日本の先生方のご意見はいいかがですか。

三宅 「学生を育てて就職先はありますか」と、よく聞かれるんですね。「保存をやりなさい」と、若い人たちに言うのは簡単ですが、その先の仕事ということを見ると、日本の場合はこちらと難しいですね。

アバロス キューバでは建築科の学生の大半は保存作業を選択します。国の経済的な状況から新しい建物は建てられないので、自ずと古い建物を守るということに熱心になるんです。だから文化遺産の仕事に携わる人が、必然と多くなるわけです。

サリナ スペインにも遺産の専門家になる手段はたくさんあります。しかし、現在はあらゆる職種において失業率が高いです。でも20年ほど前までは、かなり遺産分野において、新しい職が生まれていました。

文化の多様性を共有していくことが、世界平和の基盤になっていくと思う。

岡田 若い人への教育について、イコモスの立場から少し話しますと、我々は専門家の集団ということとで、あまり若い人を引き入れてこなかったと思うんですね。しかし、若い人を中心とした文化遺産の理念、あるいはそのプログラム

の訓練が大切だという考えはかなり前から出ています。そんなこともあつて、昨年のケベックでのイコモス総会では、若い人たちだけのシンポジウムを開きました。初めての試みだったと思いますが、企画立案から発表まで、すべて若い人たちによって行われました。そういう方向にあることは、皆さんにも知っておいていただきたいですね。

会場 先日のエクスカーションで、皆さんには熊野古道を歩いていただきましたが、どんな感想を持たれましたか。

サリナ そうですね、景観も素晴らしいと、とても良い経験をさせてもらいました。ただし、地域の管理などについての情報が、もっと欲しかったですね。でも、第一印象としては大変良かったです。

アバロス 科学的・技術的な経験というよりも、大変美しい精神的な経験をさせてもらいました。

コンテイ 熊野古道を歩いたと言つても、非常に短いものでした。ですから意見というほどのものは

出せませんが、昨日の午後の映像によるプレゼンテーションでよくわかりました。

熊野古道の素晴らしいところは、地元のコミュニティが単なる関与ではなく、いろんな修復作業にまで踏み込んで関わっているところですね。まだ観光による脅威はなさそうですが、これからは管理計画なども重要だと思いました。

宗田 三重県では地元自治体と地域の人が、いろんな勉強や討議を重ねて、「熊野古道ツーリズム」という考え方をまとめています。こうした取組が他県にも広がっていくと、文化の道の意味も出てくると思います。

また、保存や管理のプロが生まれてくるような教育を我々がしなければいけない。21世紀の若い人たちは教育するということは、自立する力、自分で創業する力を養わせることだと思えますが、三宅先生はどう思われていますか。

三宅 おっしゃる通りです。日本は戦後の高度成長があつて、非常に恵まれてきたわけですね。そして、今、まさに大きな構造転換の時代を迎えているわけです。そもそも保存とか保全がテーマになること自体、社会的な変革を意味しているわけですから、ここは頑張らなきゃいけないと思えます。

岡田 さっきの話の続きになるか

もしませんが、海外へ行くといろんな発見があります。若い人たちにもいろんな機会を通じて、そういう経験をどんどん用意してあげたいと思つています。

宗田 ほかにどなたかご意見はありませんか。

コンテイ やはり多様性というものが、この文化のエッセンスになるだろうと思います。宗教的・民族的・文化的な多様性、これこそが平和につながるものだと思います。

アバロス その多様性を共有するということが、それが平和の基盤になるのではないのでしょうか。

サリナ 私も皆さんと同じ意見ですね。遺産が平和に結びつくと思えます。

宗田 今日の各県の知事のご挨拶の中で、日本という国は文化の伝播と受容が特徴だという話がありました。つまり、紀伊山地の霊場と熊野古道には、外からいろんな文化が入つて来て、それをすべて受け入れる寛容さがあつたわけです。そういう歴史を私たちは、もう一度思い出さないといけない。そこから「文化の道」というものの意味を再確認して、世界の平和人類の未来というものを考えていきたいと思えます。

世界遺産登録5周年を記念して、世界遺産と平和について考える。登録10周年の時にも、このようなシンポジウムが開催できますことを祈っています。本日は、どうもありがとうございました。

「平和のための世界遺産」に関する伊勢宣言

2009年11月1日採択（暫定日本語訳）

前文

2009年11月1日伊勢市（日本）において開催された世界遺産シンポジウムでは、世界平和の構築と維持に対する世界遺産の貢献について研究され、議論がなされた。シンポジウムを通して、このテーマの評価に適切な事例が紹介され、参加者間で共有された。その結果、世界文化遺産及び世界自然遺産を次世代に伝えることは、人類の精神的進歩と幸福に本質的な重要性をもつこと、それゆえ真摯かつ速やかな注意を必要とする問題であることが認識された。そして世界遺産は世界平和の構築と維持に貢献することが理解された。特に、特定のタイプの遺産、たとえば「文化の道」、国境を越えた遺産及びシリアル・ノミネーションは、平和の構築と維持にとくに大きい潜在的可能性をもっていることが例示された。

この観点から、平和文化を促進するユネスコの世界遺産の概念と精神を拡張し、深化させることが重要かつ必要である。この伊勢会議に出席したイコモス「文化の道」委員会、日本イコモス国内委員会のメンバー、さらにアルゼンチン、コートジボワール、スペイン、スリランカの各イコモス国内委員会委員長、そしてオーストラリア、ブルガリア、コスタリカ、スペイン、キューバ、イタリア、ギリシャ、イスラエル、メキシコ、パレスチナ、ルーマニア、韓国、米国の各イコモス国内委員会の各代表・メンバーは、世界遺産を共有する地域における平和の構築と維持に向け、種々の困難を乗り越えても努力を続け、協力していくことが極めて重要であることを認識する。それゆえ我々は、この宣言において以下の5つのアクションプランを採択する。

宣言

アクションプラン1

世界遺産が如何にして世界平和を促進することができ、またすべきであるかについて、研究するための国際的な研究グループを立ち上げる。「世界遺産条約の執行のための運用指針」の改定の可能性も活動の視野にいれ、イコモスの諸運営管理機関にこの研究グループを支援するよう求めること。この研究グループの研究成果は、イコモス現行規則に従い、これら運営管理機関の了解を得るために提出される。

アクションプラン2

遺産を共有する条約加盟国の参加を得て、遺産の保存と伝承に対する脅威の除去と、国境をまたぐ遺産の統合的かつ包括的な、定期的監視と管理の行き届いたメカニズムの開発を促進すること。

アクションプラン3

「文化の道」のような異文化にまたがる遺産を推奨し、異なる関係者間の相互理解を促進し、人々の関係をより近づけることを目的として、かかる遺産の保護を強化すること。

アクションプラン4

世界遺産の原理に反しない限りにおいて、紛争原因の一つとしての貧困を減少させることで地域経済に役立つ諸措置とモデル事業の提案を歓迎し、また責任あるツーリズムを促進すること。

アクションプラン5

世界遺産条約の加盟国に、世界平和構築に重要な貢献をするであろう「文化の道」とシリアル・ノミネーションを特定し、包括的な学術的研究の成果を反映する形で推薦するよう勧奨すること。

「世界遺産国際交流シンポジウム伊勢2009」の成果として、参加者全員一致で『「平和のための世界遺産」に関する伊勢宣言』が採択されました。その宣言は、日本イコモス国内委員会理事の河野俊行氏によって、伊勢から世界に向けて発信されました。



Ise Declaration on “World Heritage for Peace”

Adopted November 1st 2009 Ise City, Japan

Preamble

The World Heritage Symposium held on November 1st, 2009 in Ise City, Japan, studied and discussed the contributions World Heritage makes to build and maintain world peace. During the symposium, examples appropriate for the verification of this theme were presented and shared among participants. As a result, it was recognized with certainty that the transmission of World Cultural and Natural Heritage to future generations is essential to the spiritual progress and wellbeing of humankind itself and therefore is an issue that needs serious and urgent attention. It was also understood that World Heritage does contribute to building and maintaining world peace. In particular, it was illustrated that specific types of heritage, such as cultural routes, trans-national and trans-boundary heritage and serial nominations, possess the strong potential of contributing to the building and maintaining of world peace. From this point of view, it is important and necessary to expand and deepen the concept and spirit of World Heritage in accordance with the spirit of UNESCO that promotes the Culture of Peace. In recognition of the above, we, the members of ICOMOS CIIC and Japan/ICOMOS, as well as the Presidents of the National Committees of ICOMOS from Argentina, Côte d'Ivoire, Spain and Sri Lanka and representatives/members from Australia, Bulgaria, Costa Rica, Cuba, Greece, Italy, Israel, Mexico, Palestine, the Republic of Korea, Romania and USA as participants of the Ise symposium, recognize the great importance of cooperation, despite various challenges, in the efforts toward the building and maintaining of peace in areas that share World Heritage. We hereby adopt the five actions of this declaration:

Declaration

Action 1

To establish an international working group to study further how World Heritage can and should contribute to the furthering of world peace, including the possibilities of revising the Operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention, and to request the international governing bodies of ICOMOS to support this working group which following the existing rules will submit its conclusions to them for approval.

Action 2

To encourage the development of mechanisms with the participation of relevant States Parties that share heritage for the purpose of removing threats to the conservation and transmission of heritage and ensuring the integrated and comprehensive management and monitoring of trans-national heritage.

Action 3

To promote intercultural heritage, such as cultural routes, encourage the understanding among different stakeholders and enhance it with the purpose of bringing people closer.

Action 4

To promote responsible tourism of heritage and welcome the proposal of measures and model projects that benefit the local economy by reducing poverty, a cause of conflicts, as long as such uses do not contradict the principles of World Heritage.

Action 5

To encourage the States Parties to the UNESCO's World Heritage Convention to identify and nominate for inscription on the World Heritage List, cultural routes and serial nominations that make a significant contribution to the establishment of world peace in a manner that reflects the outcomes of comprehensive scientific research.

熊野古道国際会議を終えて



日本イコモス国内委員会委員長
まえのまさる
前野 崑

昨 2009 年 10 月 30 日から 11 月 3 日まで、三重県ではイコモス文化の道国際学術委員会（CIIC）年次総会を招致して、5 日間の熊野古道国際会議が開催されました。この会議は、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されて 5 周年を迎えることから、三重県はもとより、奈良県、和歌山県等の地元、文化庁、日本イコモス国内委員会等が協力して開催されたものです。

紀伊山地の熊野古道は、地域を越え、仏教、神道、修験道など異なる宗教をつなぎ、信仰者や多くの人々の心を鎮める真の道を探る巡礼道です。その周辺の見事な文化的景観は、豊かな自然環境を損なわず護り続けてこられた林業に携われる方々が、先祖代々重ねてきた努力の賜物です。その行いはこの参詣道のあり方にとって大変評価すべきものであり、尾鷲での国際交流シンポジウムにおいても、あらためて深い感動を覚えました。

会議の期間中に、イコモス CIIC のメンバーが、熊野那智大社、花の窟を視察したり、伊勢神宮を特別参拝した後、山田工作場で式年遷宮の準備を視察し、宇治橋渡始式を目の当たりにしたことは、我が国の文化的意義を理解するうえでも誠に得難い機会でした。

伊勢での国際交流シンポジウムでは、世界平和を築くうえで世界遺産の貢献のあり方について論議されました。その中で、世界文化遺産と世界自然遺産には、人類が代々伝え重ねて来た心の糧と技、それを受け継ぐ幸せが込められており、これらの遺産を次世代に伝えることの重要さが論じられました。

さらに、これらの文化の中には、国を越え文化や宗教を伝えた歴史的な「文化の道」があり、友好的交流を進め、相互の文化を理解し尊重するならば、争うことなく平和の道が築かれるのではとの論議もありました。世界遺産というのは人類の築いてきた得難い文化遺産であり、人類の心の糧です。それを平和の糧として活かしていくことは、世界遺産の将来の発展的なあり方として望ましいと思います。将来そうした道を、我々はもちろん CIIC のメンバー、さらにはイコモス全体でそのような道筋をつけていくのであれば、イコモスの存在意義はさらに大きいものとなります。

このような世界遺産の存在意義を、熊野古道国際会議から世界に発信できたことは意義深く、将来にとっても記念すべき会議であったと思います。



世界遺産国際交流シンポジウム伊勢



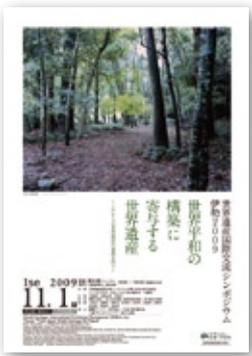
2009

世界遺産の意義から
世界の平和を考える。

11月1日には、伊勢市で国際交流シンポジウムが開催されました。

「世界遺産国際交流シンポジウム伊勢2009」は、「これからの世界遺産の意義を問う」をテーマに、同実行委員会（イコモス文化の道国際学術委員会、日本イコモス国内委員会、三重県）が主催。イコモスのグスタボ・アローズ会長、イコモス文化の道国際学術委員会のマリア・ローザ会長をはじめ、世界の道の専門家たちが参集しました。

この日の会場となった賓日館ひんじつかんは、伊勢神宮に参拝する賓客の休憩・宿泊施設として、明治20年にわずか3カ月という短期間の工期で完成しました。その伝統的な建物で始まったシンポジウムでは、実行委員会の前野会長まの、日本イコモス国内委員長、荒井奈良県知事、仁坂和歌山県知事、そして野呂三重県知事が開催の辞を述べられました。





参加者全員による 平和宣言を世界に発信。

伊勢での基調講演では、イコモスのアローズ会長が、イコモスのあり方を通じて、世界遺産の役割と概念についてお話しされました。

また、同じくC I I Cのメリア・ローザ会長は、フランスとスペインを結ぶ「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」(1993年世界遺産登録)での事例を紹介しながら、「文化遺産の保存というものは、専門家の力だけでは実現できない。政治的な力や経済的な利害から切り離された、大学や市民団体、そしてイコモスによって対応できるもの」と語りました。

この後のパネルディスカッションでは、「世界平和の構築に寄与する世界遺産の特質」をテーマに、各国を代表する道の専門家たちによって、さまざまな研究発表、事例紹介が行われました。

そして最後に、このシンポジウムの成果として、参加者全員による『平和のための世界遺産』に関する伊勢宣言が採択され、世界遺産についての重要なメッセージが、伊勢から世界に向けて発信されました。



11月2日の
エクスカーシオンでは、
伊勢神宮と山田工場へ。



伊勢でのシンポジウムの翌日（11月2日）に行われたエクスカーシオンでは、早朝に伊勢神宮内宮への特別参拝が行われ、イコモスのメンバー全員が参加しました。

2013年の「式年遷宮」に向けて、伊勢神宮では、現在、さまざまな準備が進められています。清々しい雰囲気の中、参拝を終えた一行は、神宮司庁の方に、20年ごとに社殿が建て替えられる意味など、次々と質問を浴びせていました。

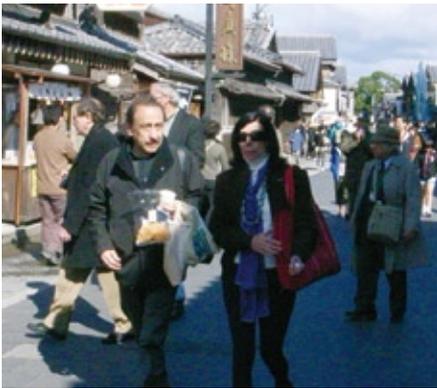
この後、一行は遷宮のご用材などを準備している神宮司庁山田工場を視察しました。ヒノキの香りが漂う製材所では、社殿の柱等に使われる大量の材木が、今から準備されていることに驚いた様子でした。また、貴重な材木が無駄なく使えるように、どの社殿のどの部分に使用するものなのか、木材の木口に墨でいねいに書き込まれていることに感心していました。

そして何より、この工作場の職人を中心とする集団が、長い歴史の中で、20年毎に更新されていく仕組に驚嘆していました。





写真提供/神宮司庁



写真提供/神宮司庁

11月3日には、 宇治橋の渡始式を視察。

内宮の玄関・五十鈴川にかかる宇治橋は、俗界と霊界との架け橋と言われています。「神様のお引越し」と言われる式年遷宮に先立って、この宇治橋の架け替えも行われ、11月3日、その渡始式が厳かに営まれました。

午前10時から始まった渡始式は、古式にのっとり、宇治橋の守り神・饗土橋姫神社に安全を祈願。橋に万度麻が納められた後、地元から選ばれた渡女を先頭に、続いて神宮関係者や全国から選ばれた親・子・孫の3代揃いの夫婦などが渡りました。

20年に1度の宇治橋渡始式に立ち会うことができたイコモスの文化の道の専門家一行は、こうして5日間の熊野古道国際会議の公式日程を無事に終え、それぞれの次の目的地に向かって三重の地を離れました。

熊野古道を守ってきた地元の関係者とイコモスの専門家との意見交換。世界遺産の意義を問い、平和の構築と維持に貢献すべきだとまとめた「伊勢宣言」採択。熊野と伊勢のエクスカーションでの交流。

世界遺産登録5周年を記念して開催された熊野古道国際会議は、私たちの新たなスタートになりました。

■付属の DVD ビデオ又は、DVD-ROM について

- ◎これらの複製及びデータの二次使用は、固くお断り致します。
- ◎盤面に DVD-VIDEO のマークがあるディスクは、映像と音声を高密度に記録したディスクです。DVD ビデオ対応のプレーヤーで再生してください。
- ◎盤面に DVD-ROM のマークがあるディスクは、Windows Media Video、Quick Time 形式のファイルが収録されています。(Windows Media Player Ver.9 以降、Quick Time Ver.6 以降)パソコンで再生してください。

謝 辞

熊野古道国際会議プレミーティング1・2、熊野古道国際交流シンポジウム尾鷲2009、熊野エクスカッション、世界遺産国際交流シンポジウム伊勢2009、伊勢エクスカッションは、次の皆様のご協力により実施されました。ここに深く御礼申し上げます。(敬称略)

◎熊野古道国際会議プレミーティング

協力：鈴木理策、前田憲司、三重大学ユネスコクラブ、山本康史

◎熊野古道国際交流シンポジウム尾鷲2009

後援：文化庁、奈良県、和歌山県、尾鷲市、熊野市、紀北町、御浜町、紀宝町
協賛：伊勢角屋麦酒、「美し国おこし・三重」実行委員会、
麒麟ビール(株)三重支社、麒麟ビバレッジ(株)中部圏地区本部、
元坂酒造(株)
協力：(株)エムアンドエムサービス、紀北国際交流協会、熊野古道協働会議、
NPO法人熊野古道自然・歴史・文化ネットワーク、
三重県立相可高等学校調理クラブ、三重大学ユネスコクラブ

◎熊野エクスカッション

協力：熊野古道語り部友の会、熊野那智大社、芝佳世子、福辻京子

◎世界遺産国際交流シンポジウム伊勢2009

助成：(独)国際交流基金、(財)文化財保護・芸術研究助成財団、
(財)岡田文化財団、大成建設自然・歴史環境基金
後援：外務省、文化庁、尾鷲市、熊野市、多気町、大台町、玉城町、
大紀町、紀北町、御浜町、紀宝町
協賛：伊勢角屋麦酒、「美し国おこし・三重」実行委員会、
麒麟ビール(株)三重支社、
麒麟ビバレッジ(株)中部圏地区本部、元坂酒造(株)
協力：(株)朝日館、(有)伊勢文化舎、縁側サミット、
NPO法人二見浦・資日館の会、三重大学ユネスコクラブ、
南川三治郎

◎伊勢エクスカッション

協力：神宮司廳

熊野古道国際会議の記録
文化の道を探る

発行 / 2010年3月

発行元 / 三重県(政策部東紀州対策局東紀州対策室)

〒514-8570 津市広明町13

TEL (059) 224-2192